

# 高島鞆之助 II\*

## 三 崎 一 明

さきの稿で<sup>1)</sup>、高島鞆之助の享年を満73歳と書いた。正しくは、満72歳と1ヶ月である。高島の享年をこのように訂正しておく。高島の誕生は、弘化元年(1844)11月9日である。これを西暦になおすと、1844年12月18日となる。なくなるのが大正5年(1916)1月11日であるから、満72歳1ヶ月となる。かぞえであれば、73歳である。

本稿では、高島と文久2年(1862)の寺田屋事件とのかかわり、明治3年(1870)の横山正太郎諫死事件とのかかわり、侍従時代の高島の動静について考察する。時間的には、文久2年(1862)から明治6年(1873)までの期間である。

### 1

高島鞆之助を3男と書いたものがあれば、4男と書いたものもある。高島は3男か、4男かどちらなのか。

高島の正しい兄弟7人の並びは、長男喜之助、長女たみ、2男彦次郎、3男研次郎、4男鞆之助、5男四郎助、次女とめ、とおもわれる。したがって、高島は3男ではなく、第5子、4男である。以下にその理由を述べる。

---

\*本稿を書くにあたって、追手門学院大学附属図書館相互利用係の方に、お世話になったことを深く感謝いたします。

1) 三崎(2007) p. 117.

橋口<sup>2)</sup>によれば、兄弟は、長男喜之助、長女たみ、2男彦次郎、3男鞆之助、4男研次郎、5男四郎助、次女とめ、男5人、女2人の7人兄弟である。

ところが、杉本<sup>3)</sup>には、4男とあり、明治元年6月1日に、兄研二郎病死につき、家督を継ぐとある。3男研二郎、4男鞆之助とすれば、「研二郎」は鞆之助の兄となる。橋口の7人兄弟が正しいとして、さらに研二郎を鞆之助の兄とすると、鞆之助は4男となる。2男彦次郎は夭逝したと考えられる。そのあと生まれたのが研二郎で、高島はさらにそのあとだとおもわれる。2男彦次郎をついで、2男研二郎と命名され、高島の弟は4男四郎助と命名されたものとおもわれる。幼くしてなくなったとおもわれる2男彦次郎をかぞえなければ、高島は3男となる。おそらく、橋口は高島を3男と聞いて、研二郎と高島を入れ替えたのではないだろうか。また、橋口は研次郎としているが、杉本にしたがい研二郎を採用する。杉本を採用するのは、杉本が編纂した『華族列伝国乃礎』は、高島存命中のものであり、高島本人、あるいは近親者、母、妻が目を通してと思われる。「本書編纂の材料は爵位局及び華族会館に現存する書類を基礎とし其他は別項に掲ぐる引用及び参考書類の外尚御足らざる所は各家に就き照会応答し之を斟酌して編纂せるものなり」、さらに「編者は之を編纂するに先ち華族各家に向け尽く照会状を送り且編集員をして歴訪せしめたり」<sup>4)</sup>とある。もちろん、杉本の照会に快く応じたものだけでなく、これを嫌うものもいて、十分に調査ができていない部分もあることわっている。また、「原稿は本人に送致し、一々正誤を求め」<sup>5)</sup>ている。それゆえに、高島の経歴で、信憑性ももっとも高いものと考ええる。これに対して、橋口の著にな

---

2) 橋口 (1932 A) p. 40.

3) 杉本編 (1893 A) 下, p. 224, p. 226.

4) 杉本編 (1893 B) 上, 凡例 pp. 1-2.

5) 同上, 凡例 p. 3.

る「革丙將軍の横顔（一）（二）（三）」は、高島、高島の母、高島の妻がなくなってからのものであり、高島の子どもたち、高島をしる人たちが目を通した、あるいはそれらの人が情報を提供したものと思われる。「日本現今人名辞典」,「大正過去帳」も、高島を4男と記述している<sup>6)</sup>。

2

文久2年3月10日、島津久光守衛として、高島は上京する。これが『国乃礎』における高島の履歴のはじめである<sup>7)</sup>。ひとの一生にはさまざまな岐路がある。岐路において、誰であれ、どの道を選ぶのか判断しなければならない。高島もさまざまな岐路を経験している。岐路は身近なところで起こる事件のときに経験する。事件をどのようにみて、どのような行動をするのかということは、ひとのその後の経歴に影響を与える。高島の経歴に影響を与えたとおもわれる事件をみてみると、文久2年(1862)4月23日の寺田屋事件もそのひとつである。この事件は、高島がすぐ近くで見聞した事件、高島と身近な人々が関係した事件である。以下、時間をおつてみる。

文久元年(1861)1月31日、有馬新七、大山格之助(綱良)、高橋祐次郎(変名美玉三平)、志々目謙吉<sup>8)</sup>、田代稻麿、是枝柳右衛門等は、脱藩して、長崎で在留外国人を襲い、それによって外国との開戦を誘い、攘夷をおこなう計画を立てる。これを是枝柳右衛門が、同志の高崎佐太郎(清風)、奈良原喜八郎らに告げて、賛成をもとめる。高崎佐太郎は、さらにこのことを大久保利通に告げている。2月1日、大久保は堀仲左衛門とともに、

6) 『日本現今人名辞典』p. たノ50, 稲村編(1973)p. 83.

7) 杉本編(1893B)p. 225.

8) 志々目謙吉は、文久2年4月8日、島津久光の命令で西郷を捕らえに来るが、捕縛せずにそのまま帰っている。西郷隆盛全集編集委員会編(1980)6巻, p. 545.

是枝柳右衛門等をいさめて、長崎襲撃計画をあきらめさせている<sup>9)</sup>。

同年4月19日、鳥津久光は宗家に戻り、国父となる。同年4月にも、有馬新七は幕政改革について建言をしている。その建言の第二案は一橋慶喜を將軍後見に、松平慶永を大老にというもので、久光がのちに幕府に建言する内容と同じである。11月21日にも、有馬新七はおなじことを建言している。これが取り上げられないで、誠忠派内部は、有馬等を中心とする過激派グループと大久保等を中心とする穏健派グループとの溝が深まる<sup>10)</sup>。

同年10月11日、久光は藩政改革をおこなう。久光の上京、出府に反対する首座家老鳥津久<sup>ひさなる</sup>久を退隱させ、その股肱の臣である蓑田伝兵衛、市来正之丞、桂久武等を免職あるいは閑職とし、小松帯刀（清廉）、中山尚之助（実善、のち中左衛門）、大久保利通、海江田武次（信義）、吉井友実等が拔擢される<sup>11)</sup>。このとき、有馬新七は造士館訓導として館内改革を命じられている<sup>12)</sup>。

文久2年（1862）1月2日<sup>13)</sup>、岡城下で、庄内の浪士清川八郎、元鹿兒島藩士伊牟田尚平（眞風、のち茂時<sup>14)</sup>）、岡藩士小河弥右衛門（一敏）等、事を挙げることを約束する。また、元福岡藩士平野国臣（二郎）は、公武合体は無理なので、すみやかに幕府を転覆して、王政復古をなすべきであるとの手紙を、同志柴山愛次郎（道隆）・橋口壮介（隸三、樺山資紀の実弟）におくる。

---

9) 高島編（1937）pp. 97-98.

10) 鹿兒島県編（1967）第3巻，p. 320.

11) 鹿兒島県編（1967）第3巻，pp. 308-310.

12) 高島編（1937）p. 108. また 同書 p. 92 によると、万延元年6月8日、造士館掛演武館掛に桂久武が任じられ、文武に奨励するものを申告し、誠忠組進出の基盤をつくっている。

13) 東京大学史料編纂所蔵版（1966）巻4，pp. 2-56.

14) 伊牟田は、万延元年12月5日のアメリカ公使館通弁官ヒュースケン暗殺に加わっている。

1月5日に、島津久光の卒兵上京が公表される。1月11日に、清川八郎等、豊後から京都に入り、田中河内介にあい、九州の志士が奮起することを話す。1月15日には、坂下門門外の変があり、老中安藤信行は水戸浪士に襲われ傷つけられている。襲撃した平山兵介（もと水戸藩士）、黒澤五郎（もと水戸藩士）、高畑総次郎（もと水戸藩士）、小田彦三郎（もと水戸藩士）、河野颯三（下野人）、川本杜太郎（越後人）、はすべて討たれる。

2月1日、江戸詰めを命ぜられた鹿児島藩士柴山愛次郎、橋口壮介の両名は、東上の途中、肥後に熊本藩士河上彦齊、松村大成（古文）をたずねる。筑後水田で、久留米藩士真木和泉（もと久留米水天宮祠官）と浪士平野国臣があい、事あげを約束する。また2月1日の日附けで、佐土原藩士富田猛次郎に柴山愛次郎、橋口壮介の連名で、決起の段取りに関して手紙を送っている。

内容はつぎのようなものである。京都伏見で、京都所司代酒井若狭守忠義をたおし、義兵を上げ、そして外国を排除し、神州の基本を確定するとし、このためにおよそ700人が必要で、富田には京都に加わるように要請している。この時点で、柴山、橋口は江戸で義兵を上げ、老中安藤信行を倒す予定である。かれらは全国で呼応すれば、倒幕は可能だと考えていた<sup>15)</sup>。

2月11日に、徳川家茂と親子内親王の婚姻があり、2月12日、酒井忠義は、親子内親王降嫁にたいする功勞により、短刀1口をもらっている。こののち4月17日、徳川家茂夫人親子内親王を、宮中では、和宮と称することが令される。そしてこの日、西郷隆盛は流刑地大島から鹿児島にかえっている。翌13日、西郷は小松帯刀、中山中左衛門、大久保利通との4者会談の席で、久光の上京、出府に反対する。

2月15日、西郷は表書院の小座敷で久光にあい、今回の上京、出府は時期尚早との意見を述べる。この時点での西郷の立場は、藩の家臣として

15) 『伊地知貞馨事歴』 pp. 28-29.

の立場であり、久光と同じ公武合体であったかどうかはわからない。久光は薩摩、大隅、日向の三州のほかでたことがない。したがって、ほかの大小名を意のままにうごかすことはできない。これでは何をしても成功しない。まずは有力諸侯と打ち合わせを十分にしてから、上京、出府すべきであると、西郷はつげる。のちになって、このときのことを久光は、市来四郎に西郷が、久光は「地五郎」だから、ひょいとでて、天下を左右することはできないと告げたといっている。「地五郎」ということばを、西郷が久光に直接つかったのか、それとも久光が市来にかたるときにつかったのかはわからないが、久光が市来にいったことはたしかである。久光が西郷に対して悪感情をもっていたと想像できる言葉である。これに対して、久光はすでに決定したことを変更しないとこたえる。また、次善の策として、浪士等に利用されないように、京都にはよらずに、直接海路で江戸に行くべきであると建言する。これも、久光は聞き入れない。久光は陸路、下関まで行き、下関から海路、大阪まで行って、入京している。まったく意見が入れられずに、西郷は指宿に引きこもるが、のち大久保らの説得で藩議に従ってうごくことになる<sup>16)</sup>。

久光が上京、出府となれば、諸国の浪士が随行を願いでることになる。面倒なことになるので、久光に先発して、浪士を鎮撫したいと西郷が願ひ出て、それが許可されている<sup>17)</sup>。

他方、この日鹿児島藩士柴山愛次郎、鹿児島藩士橋口壮介は、京都で清川八郎とあい、九州諸藩の志士との盟約、島津茂久、久光の上洛をつけ、東西呼応することを約束して、鹿児島藩士伊牟田尚平とともに江戸に行く。

2月27日、真木和泉は、鹿児島で大久保一蔵、有馬新七、田中謙助等

16) 鹿児島県編(1967)第4巻, pp. 315-318. 史談会編(1971)合本4, pp. 161-164.

17) 史談会編(1971)合本4, pp. 161-164.

と会っている。その後、真木は鹿児島に3月30日まで拘束されることになる。

3月10日、薩摩日置郡の市来港で、岡藩士小河一敏、熊本藩士官部鼎藏、萩藩士堀眞五郎、同来原退藏等と有馬新七、田中謙助、村田新八がある。各自鹿児島に入ることをあきらめ、それぞれの藩に帰る。

そして、3月16日、久光は藩兵1000人余を率いて、陸路、鹿児島を出発する。随行者は、小松帯刀、中山中左衛門、大久保一藏、伊地知正治である。西郷は、村田新八と先行している。また、有馬新七、田中謙助、三島通庸、西郷従道等数人も陸路をとる<sup>18)</sup>。

3月18日、岡藩士小河一敏が、浪士平野国臣、田近陽一郎等十数人とともに上京する。

久光は、出兵のさいに必要な糧米の確保を下関の白石正一郎に託し、森山新藏は糧米掛となり、文久元年12月2日に、軍用米買入れ代金等を支払うため2万4千5百両をもって白石正一郎のところに派遣されている<sup>19)</sup>。その森山新藏の使者からの知らせで、有馬等の挙兵計画をしり、西郷は急ぎ文久2年3月22日、下関の白石正一郎宅に到着する。そこで小河一敏、平野国臣と話をし、かれらとともに義挙に参加することを西郷は約束する。緊急事態と判断した西郷は、下関で待てという君命に違反して、村田新八、森山新藏とともに下関を出発する<sup>20)</sup>。小河、平野等も同じ日に東上する。

3月25日、鹿児島藩士堀次郎（小太郎、伊地知貞馨）が、大阪土佐側の藩邸留守居役松崎平左衛門の反対をおさえて<sup>21)</sup>、田中河内介（もと中山忠能ただやす家の家士）、清川八郎、藤本鉄石（律之助）等数十人を、鹿児島藩大阪藩邸

18) 鹿児島県維新史料編さん所編（1974）第1巻，p. 698.

19) 高島編（1937）p. 109.

20) 東京大学史料編纂所蔵版（1966）巻4，p. 32. 鹿児島県編（1939）第3巻，pp. 323.

21) 『伊地知貞馨事歴』p. 28.

に収容している。清川、藤本、安積<sup>あさか</sup>五郎はのちに天保山沖で舟遊びのさい、天保山の幕府役人に醜態をとがめられて争い、鹿児島藩に累を及ぼさないため、藩邸を追われている<sup>22)</sup>。

のち文久3年(1863)4月13日、清川八郎は暗殺され、藤本鉄石は、総大将侍従中山忠光のもと、天誅組総裁となり、同年8月17日に五条代官所を襲い、代官鈴木源内を惨殺する。同年9月24日に奈良県東吉野村鷲家口で戦死し、天誅組に参加した安積五郎はこのときとらえられ、六角牢屋で打ち首になる<sup>23)</sup>。

文久2年3月26日の夜、西郷が大阪に到着する。鹿児島藩伏見藩邸で、多数の藩士がいる前で、伊地知貞馨を面罵する。伊地知が、長州藩の長井雅楽と同じ事を唱えるのは、幕府の走狗であり、今後、伊地知が同説を唱えるなら、刺し殺してもよろしいと、一座のものに明言する<sup>24)</sup>。長井雅楽は、文久3年2月6日に、開国論をとなえた罪により、萩で自刃を命じられている<sup>25)</sup>。このことから西郷は開国には反対だったことがわかる。

3月28日に久光は下関に到着している。3月29日、伊牟田尚平は、水戸藩士住谷寅之介等に、西国志士に呼応して兵を挙げることを促す手紙を出す。

3月30日、大久保利通は、西郷が久光の命令に違反して、久光を下関で待たずに西下した理由を問いただすため下関を先発し、大阪に急行する。そして、真木和泉等は、鹿児島藩における拘束をとかれて、鹿児島から京都に向かっている。3月には、江戸から、弟子丸龍助、橋口伝蔵等、

---

22) 鹿児島県編(1967)第3巻, p. 329. 高島編(1937) p. 143. このとき舟遊びの仲間に長州藩邸にいた本間精一郎がいる。また舟遊びには参加していないが、藤本の友、飯居簡平もこのとき3人とともに薩摩藩邸を退去している。

23) 石田(1983) pp. 160-161.

24) 高島編(1937) pp. 136-137.

25) 史談会編(1976) p. 300.

鹿児島から、森山新五左衛門（永治）、高橋祐次郎（変名美玉三平）等が、脱藩して、大阪に集まっている。

4月1日、久光が下関を出発する。翌4月2日、久光は室津につく。4月6日、久光が姫路についたところに、京都から堀次郎（のち小太郎、伊地知貞馨）が岩倉具視の手紙を携えて、久光に会いにくる。このとき大阪藩邸に他藩士、浪士を入れたことを詰責されるが、すぐに了承されている<sup>26)</sup>。

京撰の状況視察を命じられた海江田武次（信義）が、この日久光に復命する。海江田は、淀川の舟中で平野国臣から西郷が平野等の義挙に参加することを約束したことをきく。そのことを久光に復命する。堀もまた西郷の動静について、久光に報告している。その結果、西郷、村田、森山は捕縛されることになる<sup>27)</sup>。

4月6日、西郷は潜伏先の宇治萬碧楼で、鹿児島藩の伏見藩邸留守居役本田弥右衛門（親雄）、森山新蔵、村田新八と飲食していたところを、大久保が、伏見藩邸まで呼び返している。そこで大久保から西郷が主命に反したことを非難される。また西郷は、これまで伏見藩邸で、小河一敏、平野国臣等としばしばあっていたことがわかっている。とくに、西郷が鹿児島藩伏見藩邸に到着した深夜に、平野は西郷を訪ね、西郷が平野等とともに事を起すはなしをしていたと、後年になって本田親雄がはなししている。ところが大久保には、事を起すつもりもなければ、扇動もしない。むしろこれを抑えるつもりであると西郷は伝えている<sup>28)</sup>。

4月10日、大阪の土佐堀藩邸についた久光は、藩士の軽挙を戒める諭書を出している。4月11日、久光は、主命に反した西郷、村田、森山を大阪から海路、鹿児島に拘送し、西郷を6月に徳之島、さらに閏8月には

26) 『伊地知貞馨事歴』p. 43.

27) 鹿児島県編（1967）第3巻，pp. 324-325.

28) 鹿児島県維新史料編さん所編（1975）第2巻，p. 240.

沖永良部島に配流している。村田は鬼界島に流罪となる。森山新蔵には咎めなしとかいてあるものもあるが、おそらく森山は山川港の船あるいは家いづれかで謹慎していたものとおもわれる。このことは、寺田屋事件の関係者が鹿児島で自宅謹慎処分を受けていることからもうかがえる。事実、森山は、息子森山新五左衛門の寺田屋での殉難を聞き、6月3日、山川港に係留されている船の中で自刃している。このとき森山は42歳である。

4月13日、久光は土佐堀藩邸を出発して、船で伏見に行く。このときの守衛人数は120人であり、このうち4組40人は、くじで決めている。くじにあたった組は、三番烏丸六左衛門組、四番橋口與一郎組、六番鈴木勇右衛門組、七番高田十郎左衛門で、そのほかの守衛は、大阪に留められる。したがって、高島は大阪藩邸に残っている。

江戸藩邸から脱藩してきた柴山愛次郎、橋口壯助、橋口伝蔵等は脱藩者であるため、土佐堀藩邸には入れないので、中之島の旅宿魚屋太平に投宿している<sup>29)</sup>。

4月15日、福岡藩主黒田<sup>ながひろ</sup>長溥が、久光の入京を無謀として、これを抑止するつもりであるとの風説が流れる<sup>30)</sup>。このため、平野、伊牟田の2人は、参勤の途中、播磨の大蔵谷に滞在していた長溥を訪ね、説得した結果、長溥は病氣と称して参勤を中止し、平野を伴って帰藩する。帰藩後、平野は博多で入牢させられる<sup>31)</sup>。また、伊牟田は喜界島に配流される<sup>32)</sup>。

4月16日、島津久光、伏見を出て入京し、公武合体のための建議をする。内容は、近衛忠熙、一橋慶喜、松平慶永等の謹慎を解いて、近衛忠熙

29) 鹿児島県編(1967)第3巻, p. 328.

30) 長溥は島津重豪の9男で、黒田齊清の養子となる。

31) 平野は、文久3年(1863)10月12日、生野の変で捕らえられる。禁門の変のさい元治元年7月19日に河原町御池の山口藩邸、御所周辺で発した火事がおさまらず、7月20日、六角牢に入獄していた平野ははじめ33人の政治犯が破獄のおそれがあるとして、新撰組によって斬首されている。京都市(1974)pp. 233-234.

32) 鹿児島県編(1967)第3巻, p. 327, 高島編(1937)pp. 143-144.

を関白に、一橋慶喜を将軍後見職に、松平慶永を大老にするというものである。4月17日、久光は一旦伏見に帰り、錦小路の藩邸に入る。

4月18日、鹿児島藩大阪藩邸の田中河内介、小河一敏等は久光の公武合体の動きにあきたらず、有馬、田中謙介、柴山愛次郎、橋口壮介等と謀り、関白九条尚忠、所司代酒井忠義を殺害して、幕府転覆の機運を全国に促す計画を実行しようとする。

これにたいして、久光は、奈良原喜左衛門（清）、海江田武次（信義）を大阪に派遣して、有馬等を諭す。4月19日には、鎮撫のため大久保利通を大阪藩邸に派遣し、有馬、柴山等を説諭させている。久光はこのうち、ふたたび奈良原喜左衛門、海江田信義を大阪に派遣し、さらに松方正義、藤井良節を大阪に派遣している<sup>33)</sup>。

4月21日、真木和泉等、海路大阪につき、鹿児島藩邸に入る。その結果、真木等一行も挙兵に参加することになり、八軒屋の京屋を宿とする<sup>34)</sup>。京都にいた萩藩士久坂玄瑞、佐世八十郎（のち前原一誠）、品川弥二郎、山県小介（有朋）等、小河一敏と謀り、呼応して兵を挙げることを約束する<sup>35)</sup>。

4月23日朝、永田佐一郎什長が、鹿児島藩の大阪土佐堀藩邸で切腹する事件が起こる。22日の夜から、23日の朝8時までには永田佐一郎組の10人すべてが大阪藩邸から淀川をさかのぼって、伏見に行って兵をあげようとしていることに責めをおってのことだとされている<sup>36)</sup>。十二番の伍長有馬新七、伍長田中謙助、以下戦士の深見休蔵、篠原国幹（冬一郎）、吉原重俊（弥次郎）、谷元兵右衛門、有馬休八、岸良三之助、橋口吉之丞、そして岩元勇助は4月23日朝8時まで大阪蔵屋敷にいて、その後伏見に行って

33) 鹿児島県編（1967）第3巻，pp. 330-331.

34) 高島編（1937）p. 149.

35) 東京大学史料編纂所蔵版（1966）pp. 52-53.

36) 伊藤（1929）pp. 284-287 では、永田は有馬等の同志であったのが、奈良原、海江田から君命を聞き、悩んだ末の行為となっている。

いる。

永田佐一郎自刃の様子である。柴山龍五郎、是枝万助が什長の薬丸に朝風呂に行くといつて、藩邸をでるときに、うなり声をきいている。永田佐一郎組の有馬休八、岸良三之助等とあい、その声は永田佐一郎自刃のときの声であることを告げられる。永田の介抱は仁礼景範等にまかせて、有馬休八等は京都に行く船の出船時刻がせまっているために藩邸を抜け出している。このとき、高崎正風も藩邸にいて、永田の介抱に加わっている<sup>37)</sup>。

永田佐一郎の自刃を、藤井良節は京都に知らせ、ついで奈良原喜左衛門、海江田信義は、高崎正風を使者として、京都に知らせる。京都に知らせがとどくのは、23日午後4時である<sup>38)</sup>。これにより久光は、事態が切迫したと判断し、鎮撫使9人の派遣を決断する<sup>39)</sup>。

4月23日、永田佐一郎に、久光から感状とともに、切米10石、葬祭料50両があたえられている<sup>40)</sup>。

### 3

文久2年(1862)3月10日、高島は、満17歳で、島津久光の守衛として、京都に上ることになる<sup>41)</sup>。戦士として活躍の場をえると同時に、高島の教育施設における学業<sup>42)</sup>はこのとき修了したものとおもわれる。このと

37) 鹿児島県維新史料編さん所編(1974)第1巻, p. 676, p. 678.

38) 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, pp. 130-131. ここでは御家老座書役の上村休助も京都に進注におよんでいる。

39) 鹿児島県編(1967)第3巻, pp. 330-331.

40) 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, p. 124. p. 133では、8石となっている。

41) 杉本編(1893B)下, p. 225, 『枢密高等官履歴』第3巻, 大正ノ一, p. 163.

42) 高島が造士館にいつから通い、いつ終了したのかは不確定である。大久保監修(1989), p. 23に「当時の士風武弁是競い幼児日用に文学等の教訓書を学ぶもの、青年にして書籍無縁を挟むものあるにこれを嘲笑疎外せし」とある。のちの高島の言動をみると「当時の士風」そのものとおもわれ

き従者約 1000 人のなかから 132 人が、久光の駕籠の前後を護衛するものとして選ばれている<sup>43)</sup>。松方正義も久光の駕籠の周りにいた<sup>44)</sup>ひとりである。

久光上京の随行者には、小松帯刀、中山中左衛門、大久保利通、伊地知正治等がいる。さきに述べたように、西郷隆盛は村田新八とともに、久光の行列に先行している。

文久 2 年 (1862) 4 月、久光の上洛当時の守衛方姓名書がある<sup>45)</sup>。五番の仕長が薬丸半左衛門、伍長が飯牟礼斎蔵と鎌田十郎太の 2 人、戦士が野津七二 (道貫)、大山弥助 (巖) 等である。六番の仕長が鈴木勇右衛門、伍長が大山格之助 (綱良)、九番の戦士に黒田了介 (清隆)、十二番に永田左一郎、有馬新七、田中謙助の名がみえる。仕長、伍長の添え書きはないが、永田左一郎が最初にある。永田が仕長<sup>46)</sup>、それに続いて記載されている有馬と田中が伍長とおもわれる。戦士に篠原冬一郎がいる。十三番の兵士に三島弥兵衛 (通庸) がいる。十四番の仕長は仁礼源之丞 (景範)、伍長の一人が野津七左衛門 (鎮雄)、戦士に海江田武二、西郷信吾 (従道)<sup>47)</sup>、赤塚源六等がいる。総勢 144 人である。このうち当分病気と添え書きのある人が 18 人、病気と添え書きのある人が 9 人いる。当分病気の 18 人を差し引くと、126 人になる。高島弥之助の書いている人数 (132 人) とすこしこととなるが、守衛という言葉が存在し、それに選ばれた人が 144 人いたことは事実である。

---

ゝ るがどうであろう。

43) 高島編 (1937) p. 127.

44) 大久保監修 (1989) pp. 25-26, に松方正義が、万延元年の島津忠義の参勤のさい、「候は御家老座書役を以て守衛方二十五人」に選ばれたとの表現がある。しかし、久光のさいには「御供」と表現している。

45) 鹿児島県歴史資料センター黎明館編 (1992) 1, pp. 381-387.

46) 鹿児島県維新史料編さん所編 (1974) 第 1 巻, p. 698.

47) 西郷信吾は僧籍に入っていたが、文久元年 9 月 26 日に還俗している。西郷隆盛全集編集委員会編 (1980) 6 巻, p. 544.

ところで、当分病氣と添え書きされている人が18人、病氣と添え書きされている人が9人いる。これらを加えると、合計27人である。このなかには寺田屋事件で傷をおった鈴木勇右衛門等も含まれているが、この姓名書に添え書きがされた時期がいつかわからない。鈴木の子が寺田屋事件における外傷なのか、その他の病氣なのかはわからない。それを考慮しても、従者143人のうちの27人ということは、従軍中の約19%にあたる兵士が傷あるいは病氣ということである。病人が異常に多い。

当時の記録をみると、3、4月以降、日本各地ではしかが流行している。はしかは6、7月にピークをむかえている。これは2月、外国の船が長崎からもたらしたものと推測されている。はしかは、長崎から京都、大阪、そして全国に拡散していく<sup>48)</sup>。久光一行の下関到着は、文久2年3月28日であり、大阪に到着するのは、同年4月10日である。したがって、はしかが流行している地域をはしかとともに久光の行列は進むことになる。はしかは感染力が強く、その潜伏期間は10日間くらいである。このことから、久光の従者も、はしかに罹病したことがかんがえられる。島津石見は、同年5月に、約200人の兵を率いて上京しているが、その途上において麻疹に罹病し、京都に到着後になくなっている<sup>49)</sup>。

寺田屋事件に連座した三島通庸等が、大阪から船で日向の細島港まで護送される。大阪をでるのが文久2年4月30日、細島港に着くのが同5月7日である。その船中のことである。

「船中皆麻疹に罹り、病苦衰態亦実に甚し」

という状態だったようである<sup>50)</sup>。コレラも流行するが、コレラの流行は7

48) 東京大学史料編纂所蔵版(1966) p. 103. 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, pp. 215-216. 富士川(1994) pp. 187-188.

49) 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, p. 160.

50) 鹿児島県維新史料編さん所編(1974)第1巻, p. 702.

月からなので<sup>51)</sup>、この時期には関係がない。ただ、のちに明治陸軍を悩ますことになる脚気の患者はいたかもしれない。

4

「久光公上洛当時守衛方姓名書」<sup>52)</sup>のなかに高島の名はない。松方正義の名もないが、松方は中小姓として随従しているのがわかっている<sup>53)</sup>。守衛方というのは、軍事方ということである。高島の名が記載されていないのは、誰かの代わりであった可能性もある。守衛方姓名書を見ると、五番の什長は薬丸半左衛門、伍長は飯牟礼斉蔵と鎌田十郎太の2人が記載され、戦兵につぎのような名が記載されている。

野津七二（道貫）、「高崎三七」、本田謙助、山口孝右衛門、讃良清蔵、飯牟礼喜之助、柴山龍五郎、大山弥助（巖）、是枝万助、の9人である。柴山龍五郎の名の横に代鎌田十郎太との添え書きがある。これは柴山龍五郎のかわりが鎌田十郎太であることを書き加えたのであって、戦兵が1人増えたということではないとかがえられる。

柴山龍五郎（景綱）がのちに語るのこうである<sup>54)</sup>。寺田屋事件前、什長は薬丸半左衛門、伍長は飯牟礼斉蔵と柴山龍五郎である。戦兵は、本田謙助、大山弥助（巖）、野津七二（道貫）、飯牟礼喜之助、山口孝右衛門、是枝万助、讃良清蔵「等」と述べている。戦兵は通常8人である。戦兵は7人までの名が上げられているが、あと1人の名をあげていない。この理由はわからない。「等」といつているのは、7人でおわりではなくまだいたということである。

---

51) 富士川（1994）p. 65, p. 232.

52) 鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1992）1, pp. 382-383.

53) 鹿児島県維新史料編さん所編（1974）第1巻, p. 829.

54) 史談会編（1972）合本11, p. 244.

これから考えられるのは、「久光公上洛当時守衛方姓名書」は、寺田屋事件のあとに書かれたものであるという事と、戦兵のところに柴山龍五郎とあるのは記入まちがいということである。問題は、「高崎三七」である。柴山龍五郎は名をあげてはいないが、「等」ということで誰かが存在した可能性がある。その誰かを「高崎三七」とする。

高島は久光の守衛として、文久2年(1862)3月10日に上京したと履歴に書いている。高島が書いている守衛がまちがいないとすれば、「姓名書」に記載漏れがあったのか、高島が誰かの代理で、いま存在する「姓名書」が書かれた時期とずれがあつて、「姓名書」には記載されていないのか。あるいは「姓名書」の記載にまちがいがあつたのかのどちらかになる。

高島が昭光と称するようになるのがいつかはわからないが、高島の幼名は三七である。そうすると、五番隊の戦士として記載されている、「高崎三七」は高島三七のことかもしれない。そうだとすれば、記載まちがいでだけでなく、もうひとつの可能性が考えられる。高島三七は、何かの事情で高島を名乗れなくて、「高崎三七」を自称したことも考えられる。

大久保利通文書にも「同士姓名録」<sup>55)</sup>がある。しかし、何のために、いつ書いたものか、明記されていない。一部の人の姓名のしたに書かれた年齢から推測すれば文久元年(1861)に書いたものであり、久光上京の随行者を大久保が誠忠組の同士の中から推薦したのではないかとの編者による説明がある。たとえば吉井のしたに三十四とある。吉井友実は、文政11年(1828)2月26日の生まれなので、文久元年はかぞえ34歳である。

この56人の名簿に「高嶋三」とある。しかしそれには編者が括弧をつけて、その下に(一次)としてある。高島一次は高島のいここにあたる<sup>56)</sup>。

55) 日本史籍協会編(1983)1, pp. 66-69.

56) 『先賢伝記集』第1巻, p. 75の系図によれば、一次の父新介は、高島の父喜兵衛と兄弟(おそらく新介が兄)である。一次は明治30年に64歳でなくなっている。公爵島津家編纂所編(1968)中, pp. 835-837に一次の名が開成所掛員として記載されている。また海軍掛員のなかに高島嘉兵衛の

この時点（文久元年）で、大久保利通を核とする誠忠組（薩摩藩の尊王攘夷派で、水戸藩士に呼応して脱藩拳兵を計画していたグループ）の勢力は拡大していたとおもわれる。久光の随行者には、誠忠組のメンバーから多数が選ばれている。そして高島も久光上京の随行者の一人として選ばれている。これらを考えると、高島は誠忠組の同士、あるいは誠忠組の正式な同士でなくてもかれらに近いところにいたのは間違いないとおもわれる。

「同士姓名録」に野津鎮雄は 27, 8 歳、野津道貫は 18, 9 歳とある。鎮雄は天保 6 年（1835）の生まれであるので、文久元年（1861）にはかぞえ 27 歳である。道貫は天保 12 年（1841）の生まれであるので、文久元年（1861）にはかぞえで 21 歳である。なぜ野津道貫は 18, 9 歳とあるのか、単なるまちがいのなのか、わからない。年齢をごまかす必要がある場合、当時であれば実際の年齢よりも高く申告するケースがおおいはずであるが、道貫の場合はそれとは逆である。道貫の年齢がかぞえ 21 歳で、文久元年（1861）であれば、高島はかぞえ 18 歳である。年齢のうえでは、高島にも同志となる資格がある。名簿の「高嶋三」は、高島一次ではなく、高島三七すなわち高島鞆之助の可能性があるとおもわれるが、どうであろう。

これよりさき安政 6 年（1859）11 月 5 日に、島津茂久（忠義）自筆の諭書<sup>57)</sup>が脱藩・拳兵を策していた誠忠組の有志一同にだされ、これ以降、大久保利通、西郷隆盛を中心とする誠忠組の同志が重用されるようになる契機となる。このときの同士姓名録 48 人のなかに、野津道貫の名はあるが、高島の名は記載されていない<sup>58)</sup>。安政 6 年（1859）であれば、野津道貫はかぞえの 19 歳であるのに対して、高島はいまだかぞえの 16 歳でしかない。同志とするには、すこし若すぎる年齢である。だとすれば、この時

↘ 名がある。また一次には明治 11 年 4 月に鹿児島県令岩村通俊に小学校再建資金の課出方法について問題があることを訴えた書類が残っている。鹿児島県史料刊行委員会編（2001）pp. 11-18.

57) 同上, pp. 288-289.

58) 日本史籍協会編（1983）pp. 66-68. 鹿児島県編（1967）第 3 巻, pp. 292-294.

点での同志姓名録に、高島の名が記載されていなくても不思議ではない。

ところで、高島を久光随行者に推挙したのは誰であろうか。西郷隆盛は大島に流罪中であるので、西郷は無関係である。高島が西郷と関係するようになるのは、のちに述べるように慶応2年(1866)からである。大久保利通は最終選考に関係したとおもわれるが、選考する藩士をすべて知っていたとはおもわれない。だれかが、推挙して、候補者リストに挙げているとおもわれる。

誰が高島を推挙したのか。考えられるのは、野津鎮雄である。あるいは奈良原繁であったかもしれない。野津鎮雄、道貫の兄弟は、両親を早くになくし、奈良原繁の家に寄食したことがあったとのことである<sup>59)</sup>。ではなぜ、野津であり、奈良原なのか。野津鎮雄、道貫、奈良原、3人とも高島とおなじ方限、高麗町のうまれであるということである。3人のほか、誠忠組の同志である高麗町出身者には、大久保利通、吉井友実、海江田信義、有村雄助、有村次左衛門、大山綱良、山口金之助、江夏仲左衛門がいる。この時点、そして、これからも、高島には高麗町という方限の出身者であることがおおきく影響してくる。大久保は幼年の頃に、加治屋町に移住している<sup>60)</sup>。西郷隆盛は加治屋町の方限であるで、ふたりが出会う機縁となる。高麗町出身者については、のちの大久保、西郷との関係からみても、とくに吉井の存在が大きいとおもわれる。したがって、高島、奈良原、野津を含め、大久保に随行者候補のリストを提供したのは、吉井と推測される。ちなみに高島の妹の結婚相手が野津道貫であり、高島の長女の結婚相手が吉井の3男、友武である。

高島の推挙にかかわったかもしれないと考えられる人物が、もう二人いる。桂久武と有馬新七である。さきにふれたように桂久武は、文久元年10月、久光の藩政改革のさいに、有馬新七は造士館訓導として館内改革を命

59) 元木編(1895)巻之3, p. 153.

60) 『三方限名士略傳』p. 20.

じられ、それぞれ優秀なものを推挙している。高島が、造士館に通っていて、かれらに優秀者として推挙されていたのかもしれない。

高島と大久保との関係である。明治3年(1870)1月29日朝、高島は鹿児島で大久保利通を訪れている。用件は軍務局についての相談である。同道しているのは野津鎮雄、桐野利秋、貴島国彦、黒田清綱である<sup>61)</sup>。大久保はこの時期、同年1月19日から同年2月26日まで、鹿児島に滞在している。島津久光と西郷隆盛に、上京を促す明治天皇の内旨をつたえるためである。大久保が東京に帰るのは同年3月12日である<sup>62)</sup>。同年2月に、高島は一番大隊、四番大隊とともに、教佐として上京している。

そして、同年5月2日、高島は大久保を訪れている。この日は、黒田清隆、野津鎮雄、西徳次郎も大久保を訪れている<sup>63)</sup>。高島は、おそらく大久保に呼ばれて、訪ねたものとおもわれる。大久保が何らかの情報を伝えるためか、大久保に何か用件を依頼されたかのどちらかとおもわれる。高島と大久保とのつながりは、西郷とのつながりよりも密なものがあったと推測できる。

## 5

文久2年(1862)4月23日夜、寺田屋事件が起きる。誠忠組の強硬派(有馬新七、田中謙助、森山新五左衛門等)が、京都所司代酒井若狭守忠義ただあき(小濱藩)、関白九条尚忠を打って、全国で義兵を上げ幕府を倒す契機とする予定で、寺田屋に集まる。これを久光の命を受けた同じ誠忠組の同士が上意打ちした事件である<sup>64)</sup>。

---

61) 日本史籍協会編(1969 B) p. 86.

62) 宮内庁(1969)第2, p. 281.

63) 日本史籍協会編(1969 B) p. 107.

64) 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, pp. 123-141.

打ち手は、鈴木勇右衛門、奈良原喜八郎（繁）、大山格之助、森岡善助（昌純）、江夏仲左衛門、道島五郎兵衛、山口金之進、鈴木昌之介、のちに上床源介が加わり、9人である。

うたれて即死したのは6人、有馬新七（正義）、柴山愛次郎（道隆）、そして江戸から参加した、弟子丸龍助（方行）、西田直五郎（正基）、橋口伝蔵（樺山資紀の叔父）、橋口壮介である。

翌日に、重傷の2人が切腹する。田中謙助（盛明）は、野津鎮雄が介錯している。森山新五左衛門（永治）は、森山新蔵の長男で、示現流達人である。鹿児島から寺田屋に参加している。新五左衛門は、仁礼景範が介錯している。こののち新五左衛門の父、森山新蔵は、さきにふれたように新五左衛門の殉難をきき、山川港で自刃する。

船宿寺田屋伊兵衛方に参集したその他の者は、久光守衛からは、篠原国幹、三島通庸、吉原重俊、大山巖、西郷従道、是枝万助（柴山龍五郎の実弟）、柴山龍五郎（景綱）、吉田清基（清右衛門）、林正之進、深見休蔵、有馬休八、谷元兵右衛門、岸良三之丞、橋口吉之丞、岩元勇助、森新兵衛<sup>65)</sup>である。江戸からは、木藤市助、町田六郎左衛門、伊集院兼寛（直右衛門）、永山弥一郎（万斎）、河野四郎左衛門であり、鹿児島からは、坂本彦右衛門、大脇仲左衛門、指宿三次、神田橋吉助である<sup>66)</sup>。

寺田屋では、有馬等が上意討ちにあったあと、奈良原の君命であるということばを聞いて、西郷従道と伊集院は刀を捨てて階下においている<sup>67)</sup>。2階の部屋では、永山と谷元がことここにいたっては潔く切腹をすべきだといいたてる。結局、久光も拳兵には賛成しているの、明日久光ととも

65) 同上、pp. 126-127。「守衛方姓名書」に森新兵衛という名はない。鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1992）1, pp. 382-383.

66) 鹿児島県維新史料編さん所編（1975）第2巻、pp. 129-130。大脇は「谷山郷土」、指宿は「鹿籠家来」、神田は「関山糺家来」の添え書きがある。この3人の名は鹿児島に送られる名簿のなかに載っていない。

67) 鹿児島県維新史料編さん所編（1974）第1巻、p. 700.

に拳兵しようという奈良原の説得と、真木の説得によって、一同は鹿児島藩邸に同行することに同意する。

これらの人は、一旦、浪人たちとともに、鹿児島藩錦小路の藩邸に収容される。奈良原喜左衛門、吉井友実、松方正義、伊地知源左衛門、志岐籐九郎が寺田屋に向かう途中に、この一行とあい、ともに藩邸に帰っている。藩邸での扱いは、優遇されるが、監視は厳しくされる<sup>68)</sup>。かれらを錦小路の藩邸で警備するのは、久光守衛の13番什長田代宗次郎組と、14番什長仁礼源之丞組である。野津鎮雄は仁礼源之丞組の伍長である<sup>69)</sup>。京都藩邸から高橋祐次郎(美玉三平)は、4月26日、脱出する<sup>70)</sup>。小河一敏等は同年4月24日に伏見につき、寺田屋事件をしり、そのまま伏見の鹿児島藩邸に入る。

4月27日、鹿児島藩の23人と田中親子、千葉郁太郎、海賀宮門、青木頼母、中村主計の6人は大阪に護送される。田中親子、千葉郁太郎、青木頼母の4人は中山忠能の依頼で、鹿児島に護送される<sup>71)</sup>。この日関山礼の家来、山本四郎(本名を神田橋直助といい、文久元年6月に外国人を襲い、幕府の追及を逃れるために変名する)は自刃する<sup>72)</sup>。

4月30日、篠原国幹、三島通庸、吉原重俊、大山巖、西郷従道等の鹿児島藩士は大阪から船で日南の細島港、その後陸行して、5月12日、鹿児島に到着する。そのまま、私邸での謹慎処分となる<sup>73)</sup>。監督役(横目という)は丹生弥兵衛、伊集院直二、渋谷三之丞、折田平兵衛で、これに兵

---

68) 鹿児島県維新史料編さん所編(1974)第1巻, p. 701.

69) 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, p. 134. 鹿児島県歴史資料センター黎明館編(1992)1, p. 386.

70) 高島編(1937) p. 155.

71) 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, p. 158.

72) 鹿児島県編(1967)第3巻, pp. 333-334. 史談会編(1972)合本11, pp. 324-325, ここでは神田橋「吉」助ではなく、神田橋「直」助となっている。

73) 鹿児島県編(1967)第3巻, p. 334. 鹿児島県維新史料編さん所編(1974)第1巻, p. 702, 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, p. 145.

具方足軽2組がこれについて、2艘の船に分乗している<sup>74)</sup>。一方の船には、三島通庸、岩元勇助、西郷従道、大山巖、木藤市助、伊集院兼寛、篠原国幹、坂本彦右衛門、森新兵衛、深見休蔵、吉原重俊等、横目として丹生弥兵衛、折田平兵衛が乗船し、他方の船には永山弥一郎、林正之進、吉田清基、有馬休八、町田六郎左衛門、谷元兵右衛門、岸良三之丞、橋口吉之丞、柴山龍五郎、是枝万助等、これに横目として伊集院直二、渋谷三之丞が乗船する。さきにふれたように、船中でみな麻疹にかかる。文久2年10月、久光帰藩後に謹慎処分がとかれている。

もと久留米藩士の真木和泉<sup>75)</sup>、真木菊四郎、酒井伝次郎、鶴田陶司、原道太、荒卷羊三郎、古賀簡次、中垣健太郎、淵上謙三、吉武助左衛門の10人、そして高知藩士の吉村寅太郎<sup>76)</sup>、宮地宜蔵、佐土原藩士の富田猛次郎、池上隼之助をそれぞれの藩に引き渡す。佐土原藩士の富田猛次郎、池上隼之助は、5月2日に、藩地に護送され、謹慎させられている<sup>77)</sup>。高知藩士吉村寅太郎、宮地宜蔵、5月13日、大阪から藩地に送還されて、禁錮となっている<sup>78)</sup>。

しかしそれとは異なる運命にあう6人のひとたちがいる。中山忠能家の諸大夫である田中河内之介(<sup>やすみち</sup>綏猷)は、文久2年5月1日、小豆島沖の船中で護送中に鹿児島藩士に斬殺されている。河内之介の長男、田中左馬介(<sup>よし猷</sup>嘉猷)も5月1日、小豆島沖の船中で護送中に刺殺される。

河内之介の甥の千葉郁太郎(<sup>とく</sup>徳胤)、そして青水頼母(<sup>のぶ</sup>宣之)、海賀宮門(<sup>しげ</sup>直家)、中村主計(<sup>しげ</sup>重義)は、文久2年5月7日、護送中に、日向細島港

74) 高島編(1937) p. 155.

75) 真木は、元治元年の禁門の変で敗れ、7月21日天王山で自刃する。

76) 吉村は、藤本鉄石、松本謙三郎とともに天誅組総裁となり、挙兵に参加する。文久3年9月27日、奈良県東吉野村鷲家で隠れていたところをみつかり射殺される。石田(1987) pp. 255-256.

77) 東京大学史料編纂所蔵版(1966) p. 64.

78) 同上, p. 72.

に到着するとともに陸上で鹿児島藩士に斬殺されている。

とくに、田中左馬介、千葉郁太郎の両名は、4月23日の寺田屋事件以降に田中河内之介を訪ねてきた<sup>79)</sup>のを、そのまま拘束して、鹿児島に護送する途中において、関係者以外誰にもわからない船中あるいは鹿児島藩内の港という場所を選んで、惨殺したものである。中山忠光が関係したため、さらには青蓮院宮が関係していたためであると推測される<sup>80)</sup>。

田中左馬之助は若干14歳である。かれらを惨殺したのは、同じ船で拘送されていた吉田清基、柴山龍五郎、是枝万助、永山弥一郎等であると伝えている<sup>81)</sup>。田中河内之介と田中左馬之介が乗せられたのは、永山弥一郎、林正之進、吉田清基、有馬休八、町田六郎左衛門、谷元兵右衛門、岸良三之丞、橋口吉之丞、柴山龍五郎、是枝万助、横目の伊集院直二と渋谷三之丞が乗船した船であったとおもわれる。したがって、三島、西郷、大山、篠原、吉原等とは別の船である。

「此時止むを得ざることあり、船中鮮血を流すの惨を見る。肢体散乱  
腥血濃々天色亦之が為に一層の暗澹たるを覚ふ」

のちに、柴山龍五郎がのべている。護送船が大阪を出港するときから台風がきていたようである<sup>82)</sup>。寺田屋事件について詳細にのべているが、田中親子と千葉郁太郎以下3人についての記述はこれだけである。このこと

79) 鹿児島県維新史料編さん所編（1975）第2巻，p. 127.

80) 鹿児島県維新史料編さん所編（1975）第2巻，p. 158. 高島編（1937）p. 131，史談会編（1972）合本11，p. 247，田中は、天皇錦旗、青蓮院宮の令旨、中山忠光の檄文を持っていたと報じられている。青蓮院宮（のち中川宮、尹宮、賀陽宮等と名を変える久邇宮朝彦親王）の第9子が東久邇宮稔彦である。東久邇宮は昭和20年（1945）8月17日に敗戦後はじめての首相となる。

81) 鹿児島県維新史料編さん所編（1975）第2巻，pp. 158-159. 高島編（1937）p. 156.

82) 史談会編（1972）合本11，p. 326.

を篠原，大山，三島，西郷従道等はしていたのかどうか。千葉郁太郎以下3人は，どちらの船に乗せられたのかはわからない。

打ち手のほうで即死するのは道島五郎兵衛（正邦）だけで，深手をおうのは森岡静左エ門（善助・昌純），山口金之進，鈴木勇右衛門，江夏仲左衛門の4人，軽傷は奈良原喜八郎（繁）で，大山格之助（綱良），鈴木昌之助（鈴木勇右衛門の子ども），上床源介の3人は無傷である。この9人は，久光から感状とともに，切米10石をもらっている<sup>83)</sup>。

誠忠組の強硬派はこれで肅清され，結果として，誠忠組は大久保利通を中心とする組織にまとめられることになる。このとき，西郷隆盛は，平野等と一味同心したとして，寺田屋事件に直接かかわることなく，すでに鹿児島に拘送されている。西郷はこのとき何を考えていたのであろうか。先に述べたように，西郷は，久光の上京は時期尚早として反対している。また，江戸にいくなら，浪士に利用されないように，京都にはよらずに海路で江戸にいけとも進言している。はたして，久光の卒兵上京を利用して，挙兵しようとする同志がいた。それに多数の鹿児島藩士がかかわっている。これらのことを十分に承知していながら，西郷は平野に一味同心すると確言している。さらに，西郷は大久保に告げている。かれらを扇動するつもりではなく，むしろかれらを抑えるつもりであるという。

西郷は，平野等と考えは同じであるが，それが短兵急な一過性の行動とならないように気を配ったこととおもわれる。しかし，西郷が4月23日の義挙に反対であったかどうかはわからない。というのも，西郷は桜田門外で井伊直弼が殺害されたことを，配流さきの大島で聞き，歓喜している。寺田屋に集まった同志のなかに，西郷従道，大山巖がいたということも，西郷隆盛がこのグループに相当コミットしていたあかしかもしれな

---

83) 鹿児島県維新史料編さん所編（1975）第2巻，p. 133，山口金之進は薄手となっている。同 pp. 123-124 では，8石となっている。鹿児島県編（1967）第3巻，p. 334，でも10石となっている。また同書，p. 332でも山口金之進は重傷となっている。

い。この挙兵で幕府が崩壊する可能性は少ないかもしれないが、幕府にダメージを与え、全国に倒幕の機運を高める状況をつくることはまちがいない。とくに幕府に好意的な孝明天皇がいる京都で倒幕の挙兵をするということは、朝廷にも多大な影響をあたえることとなり、幕府を倒壊させる過程における重要な要因のひとつとなるのはあきらかである。おそらく、西郷は平野にいったことも、大久保にいったこともどちらも本当のことだったとおもわれる。久光に建言したときには、久光のすすめる公武合体の視点からの建言であるが、倒幕の挙兵計画が広範囲に進んでいるのをしって、この時点では倒幕実現のためには、挙兵してもいいと判断していたのかもしれない。西郷自身が、久光の卒兵上京を利用しようとしたのかも知れない。

このような西郷の行動は、後年の西南戦争のときにおける西郷の行動と似ているとおもわれる。寺田屋事件のときには、事が起こる前に、島津久光の強権によって、事件と直接かかわることなく、事件から排除されることになる。西南戦争のときには、渦中から西郷を引き上げる強権を持ったものがだれもいなかった結果、西郷自身がトップとして、卒兵上京することになり、西南戦争とともに運命をともにする。

また、有馬等の挙兵蜂起は、西郷がいなくなったことでおこなわれたとみることもできるが、西郷自身外部にいて押しとどめるのは不可能と判断して、同志となって内部からなんとかしようとしたとっていること、すなわちその後におきた大和五条代官所襲撃、生野の変、禁門の変等を考えると、西郷がいてもいなくても、実行されていたことだとおもわれる。

大久保利通は、4月23日当日は午前10時に京都藩邸に出勤し、午後2時に退出している。その後、吉井友実とともに知恩院を見物し、途中茶亭で茶菓を食べて日入り前に藩邸にかえっている。高崎正風の藩邸への急使をはじめてしり、急遽参殿し、鎮撫使派遣を伝えられている<sup>84)</sup>。小松帯刀

84) 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, p. 125.

も不在で、中山中左衛門は病気で伏臥していたようである<sup>85)</sup>。久光側近の大久保としてはおかしな行動である。久光は、有馬等の動向に神経を尖らし、奈良原、海江田だけでなく4月19日には大久保自身を説諭の使者として送っている。4月23日に奈良原、海江田をふたたび送り、しかもそれだけではなく、松方正義、藤井良節までも派遣している。鹿児島藩京都藩邸が緊張していたのはまちがいない。そのときに、側近の大久保、吉井が知恩院を見物するというのは、うつべき手はすべてうったので安心ということなのか。それとも、大久保が恣意的に、藩邸にいることを避けたのか。

ただ知恩院は、鹿児島藩の京都本陣として使用されている。文久3年(1863)3月14日に久光が入京したおりには、藩邸ではなく、知恩院に宿泊して、3月18日に京都をでている。錦小路の藩邸が手狭であらかじめ知恩院借用の約束をしている<sup>86)</sup>。大久保は、たんに知恩院見学をしたのではなさそうである。

したがって、文久2年4月23日夜、島津久光のまわりには、彼が頼りとする側近、小松帯刀、大久保利通は藩邸にいなかったことになる。中山中左衛門は藩邸にいたが、病気であったようである。4月16日には念願がかなって、久光は御所に参内し、京都に滞在するとともに浪士鎮撫の勅命をえている<sup>87)</sup>。久光は他方で、久光の上京に反対するグループ(江戸詰大目付菱刈隆徴、留守居汾陽光遠は江戸藩邸から、久光の入京をとめに大阪まできている<sup>88)</sup>。佐土原藩主島津忠寛も久光の入京に反対する使者を大阪に派遣している。かれらは西郷の進言と同じこと、すなわち京都に入らず、直接江戸に入ることを進めている)を抱え、これを排除したところで、勅命に反する倒幕の暴

85) 『伊地知貞馨事歴』p. 56.

86) 高島編(1937)p. 182.

87) 東京大学史料編纂所版(1966)p. 48.

88) 鹿児島県維新史料編さん所編(1975)第2巻, p. 218, 菱刈と汾陽は、文久2年9月26日、免職となっている。

拳をおこなうというグループを抱えることになる。このグループは、久光にとって念願の地である京都で、久光の足もとで、暴拳をおこなうことを決めている。久光が、藩からも、朝廷からも、幕府からも認められ、久光にはこれからという時期である。このような状況が、4月23日の寺田屋事件をひきおこす要因となる。そしてその結果は、4月25日、孝明天皇から浪士鎮撫の功をめでられるとともに、安吉の短刀一口を下賜されている<sup>89)</sup>。さらに5月12日、近衛忠房に勧められて、通称和泉を三郎と改名する。江戸出府のさいに、老中水野和泉守との同称を避けるためという名目であるが、三郎というのは、島津家嫡流の通称である<sup>90)</sup>。久光には何よりのご褒美になったとおもわれる。

高島は野津鎮雄、道貫とともに、この事件に関係していない。有馬等の側ではなく、西郷隆盛の側でもなく、大久保利通とおなじ誠忠組の穏健派に属していたとおもわれる。しかしながら、高島がこのときに所属したと推測される五番隊からも、大山巖、柴山龍五郎、是枝万助等が、寺田屋に参加している。また、高島が投宿していたとおもわれる、大阪土佐藩藩邸で永田佐一郎は自刃している。高島はこの騒動を目の当たりで見聞きしたはずである。

有馬等と一味同心した三島通庸が書いている。「藩士にして、従わざるものあれば、則ち説くに大義を以てす」<sup>91)</sup>。三島が同志になった経緯である。大阪藩邸に滞在しているとき、柴山愛次郎、橋口壮介等が藩邸にきて、三島と柴山龍五郎を近くの神社に誘い出して、ふたりの志をきいている。そこに三島の友達である弟子丸龍助がきて、同志となることをすすめられる。このとき勧誘をふたりは断わっている。その後、田中謙介にさら

89) 鹿児島県編（1967）第3巻，p. 336. 鹿児島県維新史料編さん所編（1975）第2巻，pp. 136-137.

90) 高島編（1937）p. 158. 鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1992）1，p.416.

91) 鹿児島県維新史料編さん所編（1974）第1巻，p. 699.

に義挙に加わることを勧められ、三島と柴山龍五郎は同志となっている<sup>92)</sup>。是枝万助も龍五郎から話を聞き、同志となっている。

なぜ、三島と柴山龍五郎が一緒かという点、このふたりはおなじ方限、上之園町の出身である。この方限に、のち西郷隆盛が加治屋町から移住してくる。三島は柴山龍五郎の妹和歌子と結婚することになる。弟子丸龍助もまた上之園町の出身である<sup>93)</sup>。篠原、西郷従道、大山等はすでに同志となっているが、三島と柴山龍五郎、是枝万助は同志となつてすぐに、寺田屋事件をむかえている。高島も見聞きしただけではなく、一味同心せよとの勧誘を受けているかもしれない。このような情報は、誰かが大久保にも届けているとおもわれる。にもかかわらず、大久保は、藩邸を留守にしていたことになる。高島にはきわめて身近なところでおこり、高島に身近な人たちが関係した大きな事件であった。

島津久光はこれにより、後顧の憂いがなくなり公武合体を推し進めることになる。文久2年5月22日に勅使大原重徳とともに江戸に行く。勅使大原重徳の護衛役として、吉井友実、野津鎮雄、山内一郎、鈴木昌之助、仁礼平助、松岡善助、赤塚源六、上床八十右衛門、野津道貫、小川小次郎の10人が選ばれている<sup>94)</sup>。久光は、公武合体推進のひとつとして一橋慶喜の登用を求める。そして同年8月に生麦事件が勃発する。役目を終えて、京都に帰る久光の行列さきを乱したイギリス人リチャードソンに、奈良原喜左衛門が刀を浴びせ、致命傷をおわる。久木村治休がさらに太刀を振るい、最後に海江田信義がリチャードソンに止めを刺している<sup>95)</sup>。奈良原喜左衛門は示現流の名手<sup>96)</sup>であり、海江田信義とともに誠忠組の同士で

92) 平田 (1898) p. 24.

93) 同上, pp. 15-16. 坂本 (1930) p. 335.

94) 鹿児島県編 (1967) 第3巻, p. 338. 鹿児島県維新史料編さん所編 (1974) 第2巻, p. 155.

95) 南日本新聞社編 (1967) 上, pp. 186-187.

96) 同上, p. 153.

ある。島津久光は、同年閏8月に孝明天皇から褒勅とともに刀を下賜されている。大久保利通、奈良原喜左衛門、海江田信義、吉井友実等も参内に随従を許された11人のなかにいる<sup>97)</sup>。久光は、同年9月7日に鹿児島に帰る。高島が久光の江戸に行くとき、久光の行列の従者、あるいは大原重徳の護衛のなかにいたかどうかはわからないが、高島はそのまま京都にとどまることになる。

文久2年(1862)7月20日、関白九条尚忠の家臣、佐幕派の島田左近が鹿児島藩の田中新兵衛に暗殺され、首が四条河原に梟される<sup>98)</sup>。

文久3年(1863)4月13日に、清川八郎が暗殺され、同年5月20日には、急進的な攘夷論者である姉小路公知が、御所の朔平門外で初更(午後7時から9時)の頃、3人の賊に襲われて刺殺される。賊は刀と下駄を残して去る。刀の柄頭に、藤原の2字と縁に鎮英の2字が金ではめ込んだもので、鎮英は田中新兵衛の実名であり、さらに刀は田中のものと訴えるものがあり、仁禮景範、田中新兵衛が逮捕されることになる。田中は奉行所で自殺する。ところでこの田中は士族の出ではない。誠忠組が安政6年(1859)に脱藩を策したとき、一同は舟に乗って大阪まで行くことを考え、この船頭に田中新兵衛が予定されていた<sup>99)</sup>。とにもかくにもそのために薩摩藩は乾門警護をやめさせられ、9門からの宮中出入りを禁止される<sup>100)</sup>。

このとき高島は在京していて、仁礼景範を助けようとして、桐野利秋とともに行動している<sup>101)</sup>。仁礼が放免されるのは、同年9月20日である<sup>102)</sup>。

97) 鹿児島県編(1967)第3巻, p. 345.

98) 同上, p. 346.

99) 南日本新聞社編(1967)上, pp. 163-164. 田中は薬種商の出、あるいは漁師の子どもともいわれている。

100) 鹿児島県編(1967)第2巻, p. 192.

101) 橋口(1932) pp. 40-41. 田中と仁禮を助けようとしたのではなく、しかもこのとき自死するのは田中であるにもかかわらず、田中には触れず、仁禮を助けようとしたとだけしか述べていない。

102) 鹿児島県歴史資料センター黎明館編(1993)2, p. 496.

仁礼は、高島が育った高麗町のとなりの方限、上荒田町出身である。

6

高島と西郷の関係である。高島が西郷に随従するようになるのは、高島が23歳のときからである。

「我輩は二十三歳の時から先生に随従して居った」<sup>103)</sup>。

高島は、弘化元年（1844）11月9日に鹿児島城下高麗町で生まれている。西郷は、文政10年（1827）12月7日に鹿児島城下加治屋町山之口馬場で生まれ、かぞえで20歳のとき下加治屋町の二才頭になっている。高島と西郷は方限がことなる。ことなる方限のもの同士が親しくまじわる機会是一般的にはないとのことなので、この期間に、おそらく高島は西郷と親しくなることはなかったとおもわれる。高島の記憶が正しければ、高島がかぞえ23歳のときは、慶応2年（1866）である。かぞえ40歳の西郷は、この年1月京都で、坂本竜馬立会いのもとに、木戸孝允と薩長同盟を結び、同年3月11日に帰鹿して、5月に鹿児島で藩政改革にあたっている。そして10月15日には、鹿児島を離れている<sup>104)</sup>。高島はこの時期、鹿児島にいたと思われるので、西郷に随従する機会は、5月の藩政改革以降10月までと推測されるが、これも高島の記憶が正しければという条件つきである。高島が西郷に随従していたという期間は、きわめて短い期間である。慶応3年は、西郷はほとんど京都であり、高島は鹿児島だと推測される。明治元年は、1月の鳥羽・伏見で会う機会があり、9月に山形庄内で一緒になったくらいである。高島が西郷とともにいられたのは、明治6

103) 高島（1910）p. 45.

104) 西郷隆盛全集編集委員会編（1980）pp. 551-552.

年に西郷が帰鹿するまでの短い期間である。高島は、西郷よりも大久保とのつながりのほうが深いようである。

高島は、明治元年（1868）10月、凱旋と履歴に書いている。これは監軍黒田清隆の帰国命令をうけて、鹿児島藩兵は同年9月29日に山形の庄内城下を出ているので、この日付を高島は書いているとおもわれる。鹿児島藩兵が、京都に着くのが同年11月2日、鹿児島に帰藩するのは11月28日である<sup>105)</sup>。ところが高島自身が語るところによると、高島は、このとき守備隊附を命じられて庄内に残留している。したがって、鹿児島には帰っていない。「毎日無事に遊んで居るばかりさね」という状態で、越後から出納方の右松祐永<sup>みぎまつ</sup>がやってくる<sup>106)</sup>。

右松祐永にふれておく。西南戦争のおり、勅使柳原前光が明治10年3月9日に、鹿児島県逆徒征討、西郷・桐野・篠原の官位褫奪等を伝えるのが鹿児島県の一等属兼1等警部であった右松祐永である。このとき高島は、勅使柳原前光の護衛をしている。右松は、鹿児島県で募兵と探偵報知の役目をしていた<sup>107)</sup>。明治8年2月20日の時点では、鹿児島県令は大山綱良、参事は田畑常秋、7等出仕は右松祐永となっている<sup>108)</sup>。明治10年3月20日頃、鹿児島県庁の一室で、高島の従弟春山文平が、辺見十郎太から暴行を受けるとき、右松は立ち会わされている<sup>109)</sup>。大山綱良県令が逮捕されてのち、明治10年4月17日、鹿児島県庁大書記官田畑常秋は官位を褫奪され、後事を右松祐永に託して自死する。同年4月27日、西郷軍に協力したことにより右松等21人は逮捕される。右松他3人は、同年5月3日、長崎の九州臨時裁判所に送られている<sup>110)</sup>。

105) 日本史籍協会編（1972）p. 324.

106) 高島（1910）p. 44.

107) 鹿児島県編（1879）乾，p. 17.

108) 『掌中官員録』p. 163.

109) 鹿児島県維新史料編さん所編（1978）第1巻，pp. 939-940.

110) 鹿児島県編（1879）坤，pp. 3-6. 旧別働第三旅団参謀部編（1884）p. 265, p. 274.

藩命ではなく独断で右松祐永に後事を托して、昼夜兼行で東京に行く。西郷がいないので、ここでもまた用事をかってにこしらえてすぐ京都に行く。しばらく京都に滞在する。その間、仕事がないので、木戸孝允、大村益次郎等を訪問して話を聞くと、西郷はかつてに鹿児島に帰って、無責任だという話になる。西郷に上京を勧めるつもりで、鹿児島に帰っている<sup>111)</sup>。帰鹿した詳しい日付は不明であるが、山形にしばらくいて、すぐに東京に行き、京都にはしばらく滞在してから、鹿児島に帰っている。西郷は、明治元年11月初旬には鹿児島に帰り、日当山温泉で湯治している<sup>112)</sup>。そして、帰国した高島は西郷を鹿児島の武村の自宅を訪ねている。「鹿児島に着くや否や、直に先生を武村の居に訪うた」<sup>113)</sup>。ところで、690坪の武村邸を西郷が三崎平太左衛門から譲り受けるのは、明治2年7月8日である<sup>114)</sup>。この時期に高島が帰鹿したのではおそすぎる。ただ、これより前、安政4年(1857)に西郷は武村邸を借りて居住している。高島は藩命で帰鹿したのではなく、自己判断で帰鹿しているので、戊辰戦争中の混乱期に半年以上にわたってかってな行動はできないだろうし、またしないと思われる。さらに高島が教佐になるのは明治2年1月3日である。高島が鹿児島に帰った詳しい日付はわからないが、庄内に派遣された部隊が帰鹿した明治元年11月28日よりもおそかったのはまちがいない。そして、すくなくとも教佐の辞令をもらう明治2年1月3日には、鹿児島にいたとおもわれる。

高島は藩の命令でもないのに、しかも戊辰戦争はまだ終わっていないにもかかわらず、任地を勝手に離れ、すぐに鹿児島にも帰らないで京都にしばらく滞在し、自由に行動している。このことから、高島は山形を離れ

---

111) 高島(1910) p. 44.

112) 西郷隆盛全集編集委員会編(1980) p. 558.

113) 高島(1910) p. 44.

114) 西郷隆盛全集編集委員会編(1980) p. 559.

てから、できるだけ早くなぜかはわからないが、西郷隆盛に会おうとしたとおもわれる。すくなくとも、鹿児島藩庁に復命書を出さなければならないはずである。したがって、それほど長く京都に滞在したとはおもわれない。しかしながら、かつて薩英戦争があったとき、高島を含む在京の鹿児島藩士が、鹿児島に帰るのは藩命に違反するとして、議論した頃の雰囲気とかなり変化している。自己の判断で自由に行動する藩士（とくに武官）がでてきても、それがただしければ、とくに西郷隆盛が正しいと判断すれば、その責任は問われないという状況になっている。藩命にそむけば、謹慎させられたり、遠島になったり、切腹させられたり、さらには上意打ちにあったころとは大違いである。このことが、鹿児島藩で下級武士が藩政改革を要求することと結びつくとおもわれる。やがてその雰囲気は西南戦争に結びつくことになる。明治6年、西郷隆盛が辞職して帰国するのに応じて、近衛兵をはじめ辞職願を出すものが続出する。これに対して、明治天皇はとくに近衛将校をよんで慰留する。ところが、明治6年10月29日、近衛局長官篠原国幹は、明治天皇に呼ばれているにもかかわらず、欠席の知らせもせずに参内していない。篠原の出欠を確認するため、明治天皇は予定を1時間も遅らせている。そして、篠原が無断欠席のまま近衛将校にあって<sup>115)</sup>。しかも辞職願を出しただけで、辞職が認められていないにもかかわらず、かれらはかつてに職場を離れて帰国している。このとき、明治政府は、かれらをとがめることができないでいる。これは、高島が任地を離れて、かつてに鹿児島に帰ったことと共鳴するところがある。高島はとがめられることなく、西郷からはむしろほめられ<sup>116)</sup>、教佐となっている。このような行動をとる模範を示すのが、西郷隆盛その人である。桐野利秋以下が明治6年に経験したことを、高島は明治2年に実行したということである。

---

115) 宮内庁(1969)第3, p. 154.

116) 高島(1910) p. 44.

## 7

明治元年2月25日、軍防事務局に御親兵掛をおいている。壬生基修<sup>もとおさ</sup>、四条隆謨<sup>たかつむ</sup>、鷲尾隆聚<sup>たかつむ</sup>、平松時厚<sup>おたぎみちてる</sup>、萬里小路通房<sup>おたぎみちてる</sup>、愛宕通旭<sup>おたぎみちてる</sup>が任にあたる。長州藩の亀山隊、致人隊を軸として、十津川郷士、山科郷士、八幡郷士、多田家人、諸藩の浪士よりなるわずか400人の兵で編制されている<sup>117)</sup>。

軍防事務局は、明治元年閏4月20日、軍務官になる。その営所は、黒谷、下加茂である。軍務官に替えて、明治2年7月8日、兵部省をおく。軍務官副知事、大村益次郎が兵部大輔になる。

同年9月4日、京都三條通木屋町で、大村益次郎は<sup>くましろ</sup>神代直人、ほか数名に京都三條通木屋町の宿屋で襲われ、大阪の病院でなくなる。同年12月2日、参議前原一誠が兵部大輔となる。

山口藩の兵制改革に反対して、大楽源太郎ら除隊兵士が山口藩庁を取り囲む事件を起す。明治3年1月26日のことである。同年8月2日にヨーロッパから帰国した山県有朋、西郷従道を、同月28日それぞれ兵部少輔、兵部権大丞とし、国軍の立て直しを図る。前原一誠は同年9月2日に兵部大輔を病気のため辞任する。このとき「東京に在りて国都を守護するものはわずかに長州の兵のみ」<sup>118)</sup>という状態であり、さらに水戸藩、福岡藩はオランダ式、鹿児島藩、佐賀藩、熊本藩、名古屋藩はイギリス式、高知藩、彦根藩、米沢藩はフランス式、和歌山藩はドイツ式<sup>119)</sup>と兵器、服装も各藩でばらばらであり、寄せ集めの状態であった。統一された国軍の形成が急務である。統一された国軍を形成するには西郷隆盛の協力が必要であると明治政府は判断する。勅使岩倉具視、さらには大久保利通、川村純

117) 松下編 (1942) p. 10, p. 108, 大糸 (1939) p. 210.

118) 松下編 (1942) p. 136.

119) 大糸 (1939) p. 226.

義とともに鹿児島に西郷隆盛を訪ねた山形有朋は、西郷から鹿児島藩、山口藩、高知藩3藩の兵からなる御親兵の提案をうけ、これに賛同する。ただちに西郷隆盛は勅使一行とともに、山口藩木戸孝允、毛利敬親、高知藩板垣退助、福岡孝弟をおとずれ、それぞれから御親兵設置の了解をえる。

その結果、明治4年に2月13日、鹿児島藩、山口藩、高知藩の3藩からなる御親兵設置がきまる。鹿児島藩は、歩兵4大隊・砲兵4隊、約3000人を招請される。

高島は、明治3年(1870)2月教佐として、一番大隊、四番大隊、三番砲隊、四番砲隊とともに、上京している。高島は、一番大隊、二番大隊、三番大隊とともに上京したと履歴<sup>120)</sup>にかいているが、まちがいである。さらにこれらの隊を、高島は「御親兵」と書いている。これも但し書きがいる。任務の内容はたしかに親兵であるが、国軍としての親兵隊が正式に組織されるのは、明治4年2月13日である。さきののべたように天皇直属の御親兵は、明治元年2月25日にも組織されるが、これには鹿児島藩は参加していない。

高島は、中央集権制における国軍としての兵士でもなく、鹿児島藩の兵士として、明治政府の要請により藩主から命令されて、徴兵として、東京城および東京の警備についたのであって、明治元年、そして明治4年における親兵ではなかったということである。任務は東京の防衛であり、宮城の守衛であるため、当時、高島達は御親兵とよんでいたようである。

明治2年4月7日、鹿児島藩は600人の兵による東京警護を軍務官から命じられている。同年4月18日、京都警護の3小隊410人は東京府警衛となり、上京する。同年5月6日、西郷隆盛は小銃隊半大隊、大砲隊半小隊、408人とともに上京し、神田橋の藩邸に入る。神田橋御門内の屋敷は庄内藩酒井忠篤の上屋敷10,300坪余で、明治2年1月5日に、鹿児島藩

---

120)『枢密院高等官履歴』第3巻、p. 163.

に下賜されている。鹿児島藩ではこれを藩兵の宿舎として使用する<sup>121)</sup>。

明治2年5月12日、桐野利秋は小銃隊半大隊、大砲隊半小隊、435人を率いて上京し、鹿児島藩神田橋邸に入る。同年5月16日、西郷、桐野は1大隊と砲対小隊を率いて函館に出発する。函館戦争が終了していたので、西郷と一部の兵は同年6月5日、そのまま鹿児島に帰る。同年6月8日には、函館出軍の兵が銃隊2小隊、砲隊半小隊が東京に到着する。残りの兵は直接鹿児島に帰る<sup>122)</sup>。同年9月27日、島津忠義は、城下二番大隊と城下三番大隊、砲隊を率いて上京する。1大隊は神田橋邸を宿舎とし、残りの大隊と砲隊は数寄屋橋御門内の大河内邸と町奉行役邸を宿舎としている<sup>123)</sup>。大河内邸は、上野高崎藩8万2千石、松平右京亮輝昭の上屋敷である。松平輝昭は明治2年に改姓して、旧姓の大河内を称する<sup>124)</sup>。町奉行役邸は大河内邸の南にあった南町奉行所である。

明治3(1870)年3月に上京するのは、さきのにのべたように一番大隊、四番大隊、三番砲隊、四番砲隊である。明治3年1月17日には、皇居において明治天皇は鹿児島藩兵の訓練を1尺の雪がつもるなか見学し、兵士に酒肴料をあたえている。このときの大隊長は川村純義(最初の三番大隊長)、篠原国幹である。二番大隊と三番大隊は明治3年3月に一番、四番大隊と交代で帰国を命じられている<sup>125)</sup>。一番大隊の大隊長は桐野利秋、四番大隊の大隊長は野津鎮雄、二番大隊と三番大隊の大隊長は篠原国幹、種田政明である。川村純義は1月にはすでに在京しており、3月27日に東京に到着すると記録に記載されているのは、野津鎮雄と大山巖である。翌

---

121) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, p. 118, p. 179.

122) 同上, p. 281. これは黒田清隆の兵とおもわれる。

123) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, p. 220, p. 233, p. 238, p. 251, p. 267, pp. 378-379.

124) 東京市麹町区役所編(1986) p. 358.

125) 鹿児島県編(1967)第3巻, p. 576. 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, pp. 544-546.

28日に、種田政明は鹿児島に出発している。川村純義がいつ東京にきたのかはわからないが、篠原国幹は、3月28日前後に東京を離れたとおもわれる<sup>126)</sup>。一番大隊、四番大隊が宿舎としたのは、神田橋御門内の薩摩藩邸である<sup>127)</sup>。

また、桐野利秋は明治3年3月8日に大隊長となり、同年5月15日に、1大隊とともに鹿児島に帰っている<sup>128)</sup>。これは前年の明治2年に、三島・沖永良部島が数度にわたり大風に襲われ、砂糖の産出高が減少したことに加えて、外国の砂糖の輸入によって砂糖価格が下落したため、藩財政が逼迫し、明治3年3月19日、東京駐在兵を従来の2大隊から半分の一大隊にしたためである<sup>129)</sup>。

ところで西郷隆盛は、島津忠義とともに、明治4年3月に、城下4大隊、4砲座とともに上京したとある。鹿児島には新たに編成した1大隊(大隊長は樺山資紀、樺山は明治4年3月7日に大隊長になっている)<sup>130)</sup>が残留する。明治4年の鹿児島藩の城下常備隊は4大隊と4砲座である。そのすべてが上京したわけであるが、西郷は城下常備隊と一緒に上京したのではない。まず明治4年3月11日に、種田政明大隊長が三番大隊の5小隊を引率して、さきの上京している<sup>131)</sup>。このとき三番大隊の教頭は野津道貫(七二)と永山弥一郎、教佐は大野四郎助である<sup>132)</sup>。さらに同年4月9日に四番大隊が鹿児島を出発し、翌10日に一番・二番大隊が出発している。一

126) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, p. 545. 篠原国幹は明治3年5月2日に鹿児島藩参政を命じられ、ことわっている。同書, p. 597.

127) 山口常光編著(1973) pp. 14-15.

128) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, p. 508. 桐野は明治3年2月7日には西郷とともに山口藩に行き、16日に帰藩している。桐野は、再び上京したことになる。大山巖も山口藩に同行している。

129) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, p. 408, p. 542, pp. 552-555, p. 605.

130) 鹿児島県維新史料編さん所編(1978) p. 795.

131) 鹿児島県維新史料編さん所編(1980)第7巻, pp. 33-34.

132) 同上, p. 862.

番大隊の教頭は野崎貞澄である<sup>133)</sup>。島津忠義と西郷隆盛が出発するのは、同年4月16日である。したがって、忠義と西郷は兵の護衛なしに、わずかな供回りとともに、船で上京している<sup>134)</sup>。

明治2年11月24日、島津忠義が鹿児島に帰るとき、東京には2大隊と砲兵1大隊を東京に残留させている。このうち1大隊は桐野利秋とともに明治3年5月15日に鹿児島に帰っている。残りの部隊は小銃隊1大隊、函館から東京に配属された兵、さらには京都から東京に配属された3小隊である。京都から配属された兵は鹿児島に帰るのが延期されている<sup>135)</sup>。かれらがいつ帰鹿したのか、あるいは東京にそのままいたのかどうかかわからない。おそらく四番大隊と行をともしたとおもわれる。

さきにふれたように、『陸軍省沿革史』につきの記述がある<sup>136)</sup>。

「東京に在りて国都を守護するものは纔に長州の兵のみと為り、薩州の兵は其藩士西郷隆盛之を率いて帰藩し、土兵亦其例を逐い、兵権散じて復た収拾すべからざるに至れり」。

西郷が率いて帰藩したとあるが、鹿児島藩は2大隊2砲隊と決められた兵を派遣し、経済的理由でそれを半分にしている。高知藩はそのまねをして帰藩したと記述しているが、その実情はわからない。それぞれの藩事情があったと考えられる。この時期は東京護衛の徴兵が交代となった時期、明治3年9月だとおもわれる。徴兵の交代で、鹿児島藩兵は東京を引き払うことになる。このとき、鹿児島藩は交代の藩兵が東京に来る前に、時期を早めて東京を引き上げたとのことである<sup>137)</sup>。この時期に優先したのは、

---

133) 染川編 (1936) p. 79.

134) 鹿児島県維新史料編さん所編 (1980) 第7巻, p. 60, pp. 65-66.

135) 鹿児島県維新史料編さん所編 (1979) 第6巻, p. 252.

136) 松下編 (1942) p. 136.

137) 勝田 (2000) p. 114.

明治天皇のもとに統括された国軍としての動きではなく、それぞれの藩事情であったということである。そして東京防衛に山口藩だけが残る。東京はこのとき山口藩兵だけがいたことになり、東京防衛の空白期間が存在し、東京が一時的に無防備な状態におかれたということである。当然これは改善しなければならない。鹿児島藩から兵を上京させるには、西郷の協力が必要である。鹿児島藩兵だけが東京を守護すると、鹿児島幕府になる可能性がある、それをけん制するには、山口藩、高知藩の協力が必要である。という筋書きで、西郷隆盛、そして島津、毛利等に上京を促す勅使が派遣されたということである。

## 8

明治3年(1870)4月17日、明治天皇は、駒場野練兵場においておこなわれた練兵を閲兵している。天皇は、馬に乗り午前5時に東京城(皇居)を出て、途中吉井友実邸で小憩して、午前8時に駒場野に到着している。午前9時に、烽火一発を合図に、操練が始まる。これに鹿児島藩徴兵は第一大隊として先頭を進み、さらに鹿児島藩徴兵として1砲隊が参加している。大隊長は川村純義である<sup>138)</sup>。これには、岩倉具視、兵部大輔前原一誠も参加している。明治天皇が東京城に帰るのは、午後6時である。吉井友実は、このとき参加した兵隊を1万人と書いている<sup>139)</sup>。宮中大改革、廃藩置県は、これより1年3ヶ月後である。

明治天皇の臨席のもと、鹿児島・山口・佐賀・高知4藩の操練が、明治3年9月8日、越中島でおこなわれている。これは川村純義が、4藩の徴兵が交代となり帰藩する前に、操練の親閲を建言したことでおこなわれている。参議大久保利通がこれに賛同し、大納言岩倉具視に進言する。岩倉

138) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, pp. 579-584.

139) 同上, p. 561.

はこれを右大臣三條実美と相談して、明治天皇に諮り、天皇の承諾をえたものである。明治天皇の越中島行幸に大久保利通、広沢真臣等の参議も随行する<sup>140)</sup>。4藩の操練にはもちろん鹿児島藩からも参加している。東京に残留した大隊は四番大隊である。桐野利秋が鹿児島につれて帰ったのは、一番大隊である。川村純義は明治2年11月23日、兵部大丞になっているので、大隊長で東京に残っているのは、野津鎮雄ひとりである。したがって、越中島の操練に四番大隊を率いて参加したのは、野津鎮雄ということになる。もちろん川村純義は兵部大丞として参加する。そのさいに鹿児島藩音楽伝習隊が西謙蔵の指揮でフェイントン作曲の「君が代」を吹奏楽演奏している<sup>141)</sup>。高島はこのときの操練に参加して、「君が代」演奏を聞いたのか、すでに鹿児島に帰っていたのか。

このときの皇居から越中島までの先頭は、高知藩騎兵、山口藩徴兵であり、しんがりが高知藩徴兵である。帰りは、先頭が高知藩騎兵、佐賀藩徴兵、しんがり鹿児島藩徴兵である。練兵順は、鹿児島、佐賀、山口、高知、砲隊、鹿児島、佐賀、高知、騎兵となっている<sup>142)</sup>。

この日明治3年9月8日、東京は大暴風雨に襲われる。流失した船が突き当たり、このため永代橋は損壊・流失し、新島原では中万字屋が倒壊し、けが人が出るほど各所で大きな被害をもたらしている<sup>143)</sup>。鹿児島藩音楽伝習隊の演奏は、明治天皇の帰る前におこなわれている。練兵順からみて、最初におこなわれたと思われるが、風雨の中でおこなわれたことになる。明治天皇は7時に皇居を輿で出て、9時頃に越中島に到着している。しかし風雨が10時すぎからにわか激しくなり、しばらく操練を続行したが、調練場を海水が洗うようになったため、操練を途中で中止し、皇居

---

140) 宮内庁(1969)第2, pp. 332-334.

141) 山口常光編著(1973) p. 26. フェイントン作曲の「君が代」で、今のものとは異なる。

142) 東京大学史料編纂所(1973) pp. 421-422.

143) 東京市京橋区役所編(1983)下, pp. 1080-1083.

に帰っている。永代橋は危険ということで、これを避け、遠回りをして新大橋を渡って皇居に帰ることにする。新大橋に行くまでに旧高知藩邸前を通過した直後に、高知藩邸の長屋が崩壊する。このため随行していた大典医の青木邦彦が圧死し、正3位清閑寺豊房は負傷している。また、参議斉藤利行ももう少しで死ぬところだったと佐々木高行に手紙をかいている<sup>144)</sup>。高知藩邸でしばらく休み、危険な状態の新大橋を渡る。新大橋を渡るときは、輿丁のほかには大久保利通と広沢真臣の2人しか明治天皇の輿の周りにいなかったという状況である。皇居には午後1時過ぎに到着する。この嵐がおさまるのは夕刻である。このため同月12日に改めて操練をおこなうことになる。ところが同月11日には兵隊が交代する予定である<sup>145)</sup>。しかし、同月12日に合同演習をおこなうことになったために、交代の時期は延期される<sup>146)</sup>。

明治3年9月12日の操練に出席の予定であった明治天皇は健康がすぐれず、三條実美が明治天皇の代理をしている。その後、「御親兵」は解散となり、鹿児島藩音楽伝習隊も帰藩を命じられて、同年9月17日に四番大隊とともに鹿児島に帰っている<sup>147)</sup>。高島も、薩英戦争のときや庄内のときのように残留させられていなければ、明治3年5月15日から同年9月17日の間に鹿児島に帰り、明治4年4月9日か同月10日までは鹿児島にいたとおもわれる。さきに「御親兵」として明治3年に上京したとき、高島が行動をとともにしたのは、一番大隊か四番大隊である。高島の所属が四番大隊であれば、明治3年9月8日の越中島の操練に参加をしてから、同年9月17日ごろに鹿児島に帰ることになり、四番大隊とともに明治4年4月9日に鹿児島を出発することになる。一番大隊であれば、高島は明治

---

144) 東京大学史料編纂所 (1973) p. 423.

145) 鹿児島県維新史料編さん所編 (1979) 第6巻, p. 724.

146) 宮内庁 (1969) 第2, pp. 334-335.

147) 鹿児島県維新史料編さん所編 (1979) 第6巻, pp. 720-724, p. 739.

3年5月15日には鹿児島に帰り、一番大隊とともに、明治4年4月10日に鹿児島を出発していることになる。

中井弘という鹿児島藩出身者がいる。高島が第4師団長のとき、滋賀県知事で、高島が中井のところによく通っている。明治4年4月10日に、中井は桐野利秋の一番大隊の下士官として上京している。中井は、もと尾張藩上屋敷の兵舎にいる。中井がいると聞きつけて、中井のところに押しかけるひとのなかに、高島、野津、大山等の名前が記載されている<sup>148)</sup>。これが正しいとすると、高島は四番大隊と行をともにしていたとおもわれる。越中島で嵐にあい、「君が代」演奏をきいていることになる。したがって、高島は、明治3年9月17日に鹿児島に帰り、明治4年4月9日に鹿児島を出発している。

ところで『旧記雑録追録』<sup>149)</sup>には、高島が「御親兵」であると記載されている。また、高島についてつぎのような記述もある。年月日は、明治4年2月28日のことである<sup>150)</sup>。

「高島鞆之助営繕奉行等出立、東行本丸跡木屋掛ノ賦」

## 9

明治3年7月27日朝、横山正太郎（安武）が自死する。横山は高島と関係する人物である。横山は、天保14年（1843）1月1日、鹿児島城下城ヶ谷に森喜右衛門有恕の4男として、生まれている。森有礼の兄である。

---

148) 伊藤（1929）p. 242.

149) 鹿児島県維新史料編さん所編（1978）pp. 824-825. 高島は侍従と記載され、桐野利秋は少将函館鎮台出張と記載されている。高島が侍従になるのは明治4年7月28日であり、桐野が北海道に行くのは同年8月である。したがって、この記載日時は、同年8月以降のものである。

150) 鹿児島県維新史料編さん所編（1980）7巻，p. 859.

安政4年に横山按容の養子になる。明治元年(1868)、島津久光の5子悦之助<sup>151)</sup>(のち忠経、このとき18歳)の補佐役になり、悦之助に勧めて、明治2年4月19日、佐賀藩の弘道館、その後山口藩の明倫館に留学する。山口藩に悦之助とともに留学中、明治3年(1870)1月26日、山口藩の諸隊解散を含む兵制改革に反対し、脱退兵士約1,000人が藩庁を囲む等の暴動事件をおこす。同年2月、この報告のため鹿児島藩の許可なく独自の判断で悦之助を残して、急遽帰鹿する<sup>152)</sup>。このため久光の怒りにふれ、明治3年2月、罰せられるところをまぬがれて、みずから役を退く<sup>153)</sup>。このうち、陽明学を学ぶため京都の春日潜庵の塾を訪ねるが、春日潜庵が謹慎塾居中のため入塾できず、7月東京に出て田口文蔵<sup>154)</sup>の塾に入る。そして同月27日、自死する<sup>155)</sup>。

明治3年7月27日午前4時ころ、神田橋御門内の鹿児島藩邸西門の門番に父、友人宛の遺書を革袋に入れて託し、徴兵本営に届けるように依頼する。その後、したためた「時弊十条」、「征韓の非」、2通の建言書を、竹のさきに差し挟んで、7月26日の夜に、それを集議院の門扉に挿して、集議院の南隅、津藩邸裏門前<sup>156)</sup>で切腹する。集議院は神田橋御門内の鹿児島藩邸の西隣の山口藩邸(旧姫路藩邸)にあり、津藩邸は鹿児島藩邸の南隣にあった。横山は発見されたとき、まだ言葉を交わせる状態であ

151) 明治14年(1881)2月11日に死去している。鹿児島県維新史料編さん所編(1980)第7巻, p. 1009.

152) 日本史籍協会編(1969B) p. 87.

153) 鹿児島県歴史資料センター黎明館編(1996) 5, pp. 696-697.

154) 干河岸編(1900) pp. 412-415. 田口は江戸深川で文政元年(1818)1月5日に生まれ、明治6年(1873)1月17日になくなり、田口の碑文を中村敬宇が書いている。慶応3年(1867)11月には徳川慶喜に二条城に呼ばれ諮問されている。

155) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, p. 662. 家臣人名事典編纂委員会編(1989). 新人物往来社編(2000) p. 243.

156) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, p. 661に「津軽藩」とあるのは「津藩」の誤記である。

り、すぐに鹿児島藩邸に引き取られ介護され、切腹の理由などを聞かれたうえ、田中周蔵から集議院で建言が取り上げられたと告げられたのち同月27日の昼ごろになくなっている<sup>157)</sup>。

大久保利通は、27日には伊地知正治から横山の自死をきいている。集議院で審議中の藩制の原案作成者のひとりが大久保であり、これにおおいに異議を唱えているのが伊地知である。またこの日、開拓次官黒田清隆は樺太出張を命じられて、大久保にいとまごいの挨拶をしている<sup>158)</sup>。この樺太は、のちに征韓問題とおおきく関連してくることになる。この7月27日という日は、大久保、伊地知、西郷、3者3様の道を決める契機となる日である。

藩邸では、横山を芝大圓寺に翌日葬るとともに、葬式料・法事料を下賜している。8月9日には、忠義から感状があたえられ、祭祀料が下賜されている。

明治2年3月7日に開院された公議所が、明治2年7月8日、集議院と改称され、上局、下局がおかれる。集議院の長官は、大原重徳、次官は阿野公誠、下局次官は丸山作楽である。公議所は大手町の神田橋内旧姫路藩邸(山口藩邸)に開設されている。集議院開院のため明治3年4月中に上京せよと議員に達せられ、明治3年5月28日に集議院は開院され、9月10日に閉院する<sup>159)</sup>。のち明治6年6月25日に左院に併合される。

集議院規則によると、公選された議員4名が、3・8の日に集まり、建白書の可否を決めることになっている。集議院の定例会は、2・7の日に開かれる、但し書きで、2・7の日でもほかに議事がないときには、建白書の可否を決めるとなっている。横山はそれを承知していて、26日の夜に決行したとおもわれる。

---

157) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, pp. 659-672.

158) 同上, p. 655.

159) 内閣官報局編(1974)第3巻, p. 121, p. 341.

遺書を入れた革袋には、大迫喜右衛門（貞清）と野津七左衛門（鎮雄）のふたりに連名で宛てた書付があり、なかの遺書2通を開けるように依頼している。遺書のあて先は、ひとつ目は大迫貞清宛てのものであり、ふたつ目は中島健彦と安田安彦との連名宛てのもの、そしてみつつ目が高島と田中周蔵の2人に連名であてた遺書である。よつつ目は親元に送る書状である。いつつ目は島津真之助（島津忠濟）宛てのものである。遺書2通とあるが、どのように二分していたのか記録にはない。おそらく大迫・友人宛と親元宛のものが2通別にされていたとおもわれる。島津真之助宛のものは大迫貞清に処置をまかせているので、大迫貞清宛ての書状のなかにあったとおもわれる。

島津忠濟（真之助）は、数年前に高島が小姓として仕えたひとである。横山とどのような関係があったのかはわからないが、遺書を残すほどのつながりがあったことになる。横山は、真之助の兄、悦之助の養育掛であったので、その関係から真之助とのかかわりがあったのかもしれない。そうであれば、高島と横山の関係も、高島が小姓として真之助に仕えていたときにできたのかもしれない。

大迫貞清宛ての遺書のなかで、西郷隆盛が藩政に参加する（明治3年7月3日、ふたたび鹿児島藩大参事となる）のを聞いて、何もいうことはなくなったと書いているくだりがあり、横山が西郷によせる信頼の程度がよくわかる。西郷もまた、明治5年に、横山の墓碑を書いている。その碑文に「朝廷百官遊蕩驕奢、而誤事者多」という文をいれて、西郷も横山と同じおもいであるとして、横山をたたえている<sup>160</sup>。

「(略) 御両殿様へも建白の賦相認居候処、西郷氏奉職承り、百事心に懸る事なく態と差扣申候 (略)」。

160) 鹿児島県維新史料編さん所編（1979）第6巻，pp. 671-672.

大迫貞清の経歴である。大迫は、文政8年(1825)5月7日に鹿児島城下平之町に生まれ、明治29年(1896)4月27日になくなっている<sup>161)</sup>。通称は喜右衛門である。大迫は、鳥羽・伏見の戦いの時の二番遊撃隊の小隊長である。鳥羽・伏見の戦いののち、二番遊撃隊は解散する。その結果、三番遊撃隊が二番遊撃隊となり、越後・庄内で戦う。この二番遊撃隊の監軍のひとりが高島である。大迫は鳥羽・伏見の戦いののち東山道先鋒総督本営付として、東北に転戦し、白河口の戦いで負傷している。明治2年2月には、鹿児島藩の参政6人のうちの一人(他の5人は桂久武、伊地知正治、橋口彦二、伊集院兼寛、西郷隆盛)となっている。明治3年4月29日、職制改革で鹿児島県権大参事に任命された6人のひとりである。大参事は西郷隆盛である<sup>162)</sup>。したがって、横山の諫死事件は、大迫貞清が権大参事するとき、西郷隆盛が大参事するときにおきている。大迫は、明治5年11月19日に陸軍少佐から陸軍中佐となり、明治6年4月5日、第四局第一経営部司令官となり、同年6月25日、正6位に叙せられ、第四局第一課長となっている<sup>163)</sup>。その後、明治7年1月13日に静岡県権令<sup>164)</sup>、明治9年4月4日に静岡県令<sup>165)</sup>、明治17年2月8日に警視總監、明治19年4月27日に沖縄県令、明治19年7月19日に沖縄県知事を務め、明治20年(1887)5月24日に子爵(従4位勲3等)となる。さらに明治25年11月4日から明治27年1月20日まで鹿児島県知事を務めている。

さて、高島と田中周蔵の2人に宛てた遺書である<sup>166)</sup>。

「是迄不浅御懇意万々忝奉存候、今日長別一首を残置候、御志之御方

161) 家臣人名事典編纂委員会編(1989)p.503.

162) 鹿児島県編(1967)別巻,p.15.

163) 朝倉編(1988)1巻,p.269,p.354,p.543.

164) 東京大学史料編纂所蔵版(1998)p.366.

165) 同上,p.439.

166) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻,p.665.

御申談可然様具、奉願候、

かきなて、我かうへおきしくすの子を

いやかきなて、いやましにませ

7月26日

横山弟

高島兄

田中兄

追て同郷中に別紙不呈、宜敷御伝可被下候、高城氏等是亦奉願候」

というものである。

明治3年8月10日、太政官から横山正太郎に祭祀料100円が下賜される。兵部大輔大村益次郎が暗殺されたときに下賜された祭祀料300円に比較して、無位無官である横山に対して破格の扱いである。

横山の諫死は、当をえたやり方ではないと、一部ではあまり評判がよくなかったらしく、同年8月初旬には大隊長桐野利秋がうごく（兵を連れて上京してくる）とかいう風聞もあったようである。横山の諫死は、鹿児島藩の謀略であるとの疑念を他藩のものもったようである。当時海軍費の上納について、鹿児島藩、山口藩、高知藩の3藩がともに問題視していた。とくに鹿児島藩の伊地知正治はおおいにこれに不満で、それを横山の諫死というかたちで表現し、他藩に圧力をかけたとみられたようである<sup>167)</sup>。当時、海軍の重要性を認識していたのが、岩倉具視、大久保利通、伊地知正治、川村純義等である<sup>168)</sup>。海軍を朝廷の海軍とするのか、藩の海軍とするのかについて、大久保と伊地知との対立がある。大久保の立場は

---

167) 東京大学史料編纂所(1973) p. 403.

168) 海軍歴史保存会編(1995) pp. 62-63. 明治3年5月1日兵部省は「大いに海軍を創立すべき議」で建艦計画等海軍健軍について建議し、5月3日兵部省の予算30万石のうち海軍18万石、陸軍12万石の予算配分が決まっている。明治元年、同2年の予算配分では陸軍は海軍の10倍を超える予算をえていた。

朝廷の海軍であり、伊地知の立場は藩の海軍である<sup>169)</sup>。この時点で、国家運営について伊地知は大久保と完全に袂を分かつことになる。大久保は中央集権をめざしており、伊地知は地方分権を軸としている。西郷がこの点でどうであったのかはわからない。のち、西郷が御親兵設置を提案するときには、あきらかに中央集権をめざすことになる。

明治3年5月28日、集議院において、三条右大臣、岩倉大納言、徳大寺大納言、大久保参議、広沢参議、副島参議、佐々木高行参議等列席のもと、大久保利通等が作成した藩制案（第1条から第14条までである）が下問される。出席議員数は219人である<sup>170)</sup>。鹿児島藩は欠席している。その第4条は、藩高から知事家禄を除いたものの5分の1を「海陸軍費」<sup>171)</sup>と定めている。知事家禄は10パーセントであるので、残り90パーセントの5分の1、つまり藩高の18パーセントが、海陸軍費となる。この海陸軍費のうちの半高、つまり9パーセントを海軍費として朝廷に上納し、残余の9パーセントは各藩で陸軍費として使用せよというものである。

この5分の1条項に、各藩が異論を唱える。藩の財政が逼迫しているときに、5分の1の半額を朝廷に上納することは困難であるということである。鹿児島藩では、伊地知が反対する。伊地知の論拠は、単に財政上の問題にとどまらず、海軍力を国が持つのか藩が持つのかという、明治政府存立の根幹にかかわるものである。このためかどうかわからないが、鹿児島藩の集議院議員は、藩制を審議する集議院を欠席している。山口藩と高知藩とともに、第4条、第6条、第12条、第13条に異議を唱えている。佐賀藩を含む21藩は、14か条すべてに賛成している。この日明治3年6月

169) 千田 (1978) p. 281.

170) 明治文化研究会編 (1967) 第1巻, pp. 200-214.

171) 明治3年 (1870) 10月2日、兵制を海軍はイギリス式を、陸軍はフランス式 (明治18年にドイツ式) を採用する。そして、明治5年には1月8日が「陸軍始め」、翌9日は「海軍始め」と定められる。それまではオランダの様式どおりに「海陸軍」という用語を使用していたのが、この日から「陸海軍」と表現がかわる。海軍歴史保存会編 (1995) p. 63.

13日、集議院審議に出席した議員数は197人である。引き続き6月29日に第4条を審議している。山口藩を含む95藩は、5分の1に替えて、10分の1を提案している。この修正案に、さきには原案に賛成していた佐賀藩が同調している。高知藩は20分の1を主張している。この日も決まらず「衆議難纏」でおわる<sup>172)</sup>。

藩制が太政官から布告されるのは、明治3年9月10日である。5分の1条項はつぎのようになる。藩高の10パーセントは知事家禄、残余90パーセントのうち10分の1が「海陸軍資」となっている。半額は海軍資として官に納め、半額は陸軍資にあてるとなっている<sup>173)</sup>。つまり、海軍は中央政府が統括し、各藩は藩高の4.5パーセントを明治政府に納めることになる。藩制案の上納額の半分である。しかし、明治政府はこれで海軍という直轄の軍事力をもつことになる。日本に開国を迫った国際社会も各国の海軍力を背景にしている。中央集権国家として国際社会にでようと考えている明治政府の指導者たちにはおおきな弾みとなる事柄である。

西郷隆盛が、海軍を中央政府直轄とすることにどのような立場であったかはわからない。海軍費上納額は減額となったが、藩制は認められているので、この時点でも、西郷は朝廷の海軍に反対ではなかったとおもわれる。こののち、朝廷の海軍がその威容をみせつけるのは、西郷が計画し、実行する明治5年5月の西国巡幸においてである。

横山は、時弊十条の「第四」につぎのようにのべている<sup>174)</sup>。

「道中人馬賃錢を増し、且五分の一の献金等総て人情事実を不察、人心の婦不婦に不拘、酷薄の所置也」

---

172) 明治文化研究会編(1967)第1巻, pp. 204-210.

173) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, pp. 724-725.

174) 同上, p. 660.

文中の「五分の一の献金」が、藩収入の90パーセントの5分の1を海陸軍費とし、その半額（藩収入の9パーセント）を海軍費として朝廷に納めよという藩制案の第4条のことである。横山も第4条だから、おそらく「第4」にしたとおもわれる。

鹿児島藩に対する疑念を払拭するため、鹿児島藩庁は横山正太郎に太政官から下された目録返上を布達するとともに、同年8月18日、太政官から下賜された目録返上を太政官に上申する<sup>175)</sup>。文面は、横山は誤聞にもとづいて建言し、かつ自死したのであって、つまり間違っただけをしたのでお咎めがあつてしかるべきであり、祭祀料をいただくわけにはいかないということである。

この上申書を、鹿児島藩大参事西郷隆盛が書き、それを教頭の池上四郎がたずさえて、8月25日太政官への使者に立つ<sup>176)</sup>。結果は一旦下賜したものを、返上した例はないとして却下される。これをうけて、藩庁は御扶持米35俵を30年間下賜し、横山を靖献霊社に配祀することを決める。同年10月8日には、靖献霊社に合祀することが知政所から遺族に通達され、同月9日に祭祀がおこなわれる<sup>177)</sup>。

横山の時弊十条は、政府の高官たちがおごり高ぶって、国のためではなく自分たちのために政局を運営し、しかも大局観がなく朝令暮改であり、民を苦しめ、とまどわせている。今後はすべてのことを公平にせよというものである。その第9番目に、「黜陟の大典不立、多は愛憎を以て進退す、春日某の如き廉直の者は、却て私の恨を以て冤罪に陥る数度なり、是岩倉・徳大寺の意中に出と聞く」とある。誤聞というのは、とくにこの文

- 
- 175) 鹿児島県維新史料編さん所編（1978）p. 754、鹿児島県維新史料編さん所編（1979）第6巻、p. 669。  
176) 鹿児島県維新史料編さん所編（1979）第6巻、p. 703。8月13日に、野村彦四郎は久光に、横山は忠臣であり、慰霊すべきとの上申をしている。鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1996）pp. 703-704。  
177) 鹿児島県維新史料編さん所編（1979）第6巻、pp. 760-762。

章であろう。寺師宗道日記では、「奸徒之讒言等にて間違おもい込」<sup>178)</sup>と表現している。横山は誰からそれを聞いたのか、誰が横山に言ったのか問題とするひとがいたのは想像に難くない。また実名を挙げられた岩倉具視、徳大寺実則には迷惑なことであり、こちらからも不都合との声があったとおもわれる。岩倉具視、徳大寺実則両人は、このとき大納言である。

横山が春日某と書いているのは、春日潜庵のことである。春日は、文化8年(1811)8月3日、京都に生まれ、明治11年3月23日になくなる。名は仲裏という。陽明学者で、15歳のとき内大臣従1位久我通明の諸太夫となる。佐藤一斎、藤田東湖、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、島義武等と嘉永・安政以来交友がある。明治2年3月に、久我通久から謹慎・蟄居を命じられている。

横山は春日のところで学ぶつもりが、謹慎・蟄居中のために春日のところで学べず、悔しいおもいをしたため、集議院の上書に春日のことを記したようである。このことは、のちに春日のところに学びにきた西郷小兵衛が語っている<sup>179)</sup>。春日は、安政5年(1858)7月10日に、西郷隆盛、吉井友実に、京都であい、情報を交換している。その後、春日が西郷隆盛に書簡を送っている<sup>180)</sup>。明治7年5月22日である<sup>181)</sup>。書簡を西郷に届けるのは、春日の隣人で高島六蔵という人である。

市来四郎(寺師宗道の弟)は、明治2年春に、集議院の不体裁を論じ、国会の体裁にすべきとの提案を赤松則良、宇都宮三郎、松元良順、内田正風、伊集院兼寛等としている。国会の体裁とは赤松則良が外国の本で調べたものであるが、当時は祭政一致主義であり、取り上げられなかったと述べている<sup>182)</sup>。

---

178) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, pp. 670.

179) 春日(1906) p. 123.

180) 同上, pp. 126-130.

181) 西郷隆盛全集編集委員会編(1979)5, pp. 527-530.

182) 鹿児島県維新史料編さん所編(1980)第7巻, pp. 990-991.

また別紙添書はつぎのように書かれている<sup>183)</sup>。

「朝鮮征討之儀、草莽間盛に主張する由、畢竟、皇国之萎靡不振を慨嘆するの余り、斯く憤激論を發すと見えたり、雖然兵を起すには名あり、義あり、殊に海外に対し、一度名義を失するに至ては、譬え大勝利を得るとも、天下万世之誹謗を免るべからず、兵法に己を知り、彼を知ると云うことあり、今朝鮮の事は姑く舍き、我国の情実を察するに、諸民は飢渴困窮に迫り、政令は些細の枝葉のみにて、根本は今に不定、何事も名目虚飾のみにて、実効の立所甚だ薄く、一新とは口に唱ゆれども、一新の徳化は聊も不見、万民恟々として隱に土崩の兆しあり、若し我国勢充実盛大ならば、区々の朝鮮豈能非礼を我に加んや、慮此に不出、只朝鮮を小国と見侮り、妄りに無名の師興し、万一蹉跌あらんは天下の億兆何と云ん、蝦夷開拓さえも、其土民の怨みを受くる多し、且朝鮮近年屡外国と接戦し、頗る兵革に慣ると聞く、然らば文祿之時勢とは同日之論にあらず、秀吉之威力を以てすら、尚数年の力を費す、今佐多某輩所言の如き、朝鮮を掌中に運さんとす、欺己欺人国事を以て戯とするは、是等の言を謂なるべし、今日の急務は先ず綱紀を建て、政令を一にし、信を天下に示し、万民を安堵せしむるに在り、姑く蕭牆意外の変を図るべし、豈朝鮮の罪を問に暇あらんや、

右は至愚之見込に御座候得共、添て差上申候」

横山が文中で佐田某と述べているのは、佐田白茅（素一郎）のことである。久留米藩士で、真木和泉とともに討幕運動をしている<sup>184)</sup>。明治2年12月6日、外務少録森山茂等とともに、外務省出仕佐田白茅が、朝鮮に派遣

183) 鹿兒島県維新史料編さん所編（1979）第6巻，pp. 660-661.

184) 伊藤（1925）p. 402.

される。目的は、さきに朝鮮に与えた国書（日本の大政一新の通告）の回答を催促することである。国書不受理の朝鮮に対して、佐田は対韓政策（征韓論）の建白を、明治3年3月におこなっている<sup>185)</sup>。この征韓論に対して、横山は反対の意見を述べている。西郷が横山と同様に征韓論に反対であったかどうかはわからない。しかし、横山が残した遺書から類推して、横山は、西郷の影響下にあったとみることができる。この時点では、中央政府はもとより地方政府も、それぞれの基盤の確立が急務であったため、西郷も対外問題よりも国内政策を優先していたとおもわれる。

弾正台は、横山の諫死に対して好意的な上申書を提出している<sup>186)</sup>。

「本日廿七日、鹿児島藩士横山正太郎政体を裨益し、国恩に報ぜんとするの誠心より、時事十条の建議を集議院に献し、死を以て採用あらんことを願い、終に其藩邸外に於て腹を屠る、幸にして未だ絶せず、同藩の士之を保護療養するに、因て其情実を問究し、且建言する所の書、既に政府に達するを告ぐるを得たり、於是欣然瞑目すと、嗚呼斯の如き者実に憫むべく、又哀むべくのことにして、天下常に無くして稀に有る所の者なり、夫れ人に賢愚あり、才に大小あり、故に其議する所、当不当は姑らく措て論ぜず、其心を推し其情を量るに、蓋し国家を憂うるの深き者に非んば為す能わざる所なり、聖明上に在り、賢相之を輔け、待詔の局を設け、建言の門を開き、肝宵治を求むるの秋に当り、斯の如き士ありて、其心を愛せず、其情を憫まず、空しく狂名を取らしむるは、聖代民を仁するの意に有らざる也、冀くば其言採るべきは之を採り、採るべからざるは之を恕し、其誠心を賞し、其所為を旌わし、天下をして奨励自奮せしめ、生者は益其力を展へ、死者亦將に余榮あらんとす、是臣等の黙する能はずして、尊嚴を

185) 外務省編 (1994) pp. 138-140.

186) 鹿児島県維新史料編さん所 (1979) 第6巻, pp. 661.

冒瀆する所以也、今台員檢察する所を具記し、并て別に奏す、伏て願わくば臣等奏する所を以て、速に哀恤の典を行い、義烈を表し玉わば、特に臣等の幸いのみならず、天下万世の大幸なり、謹奏、

庚午7月晦日

彈正台」

彈正台は、明治2年5月22日に設置され、明治4年7月9日、廃止されている。このときの彈正台尹は九条道孝、彈正少弼が黒田清綱である。黒田は西郷隆盛と親しい間柄である。吉井友實は、明治3年4月18日に彈正少弼から民部少輔兼大蔵少輔に任命されている。また、海江田信義は彈正大忠を明治3年5月22日にやめている<sup>187)</sup>。

横山の墓所の玉垣寄附者に方限からの寄付者として、田中周蔵の名前はあるが、高島の名は記載されていない。また、墓所の石燈籠寄附者に本営詰からの寄付者として、大迫貞清、野津鎮雄、海江田信義、淵辺高照の名がある。個人でも海江田信義は石燈籠1本を寄附している。ここにも高島の名はない。

のちに述べるように、高島が鹿児島に帰るのは、明治3年9月17日だと推測される。したがって、同年7月には、東京の本営にいたとおもわれる。さらに、墓碑にも高島の名は記載されていない<sup>188)</sup>。

横山の諫死事件は、後年になって思いもかけないところで評価されることとなる。藤井甚太郎はつぎのようにのべている<sup>189)</sup>。

「又薩藩の横山正太郎が三年七月に時弊数条を列記して集議院前で自殺した事などを見ると、議会政治の面影が、大に表れて来ているような気がする」。

---

187) 金井他(1981) pp. 73-74.

188) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, pp. 670-672.

189) 明治文化研究会(1967) pp. 7-8.

明治政府にとっても、鹿児島藩庁にとっても衝撃的な事件であった。高島は東京でも、藩内でも注目を浴びる大事件にかかわったことになる。

10

明治4年(1871)2月13日、明治政府は、薩長土3藩から徴集して、親兵編制を決める<sup>190</sup>。明治政府は、朝廷の海軍に続いて、朝廷の陸軍を創設する。この翌日14日には、華族の戸籍はすべて東京に移すという布告がでる。明治3年11月20日には、知藩事を除く旧藩主は東京に居住することになっている<sup>191</sup>。中央集権の基礎を築くための施策である。これにより、地方における旧藩主という求心力はうしなわれることになる。

鹿児島藩、山口藩、高知藩の3藩からなる御親兵は6,275人である。鹿児島藩兵は3,174人で<sup>192</sup>、それを収容する兵舎がいままでの東京鹿児島藩邸だけでは狭いのであたらしい兵舎が必要となる。市ヶ谷の尾張藩上屋敷81,144.3坪<sup>193</sup>がそれにあてられる。西郷も当初はそこに滞在する。明治政府は、はじめ離宮にする予定で尾張藩上屋敷をとりあげ、支度金6,000両(6,000円)を下賜して、尾張徳川家の屋敷を永田町に移している。その後、離宮は赤坂の和歌山藩上屋敷におくことになる。それをみて東京府が、御親兵の兵舎として使用することを願い出で<sup>194</sup>、明治4年2月24日に兵部省所有となり、御親兵の屯所となることになったものである<sup>195</sup>。そして兵部省は、鹿児島藩に対して市ヶ谷の尾張藩上屋敷を屯所として使

---

190) 松下編(1942) p. 135.

191) 東京都編(1965) pp. 109-110.

192) 山口(1973) p. 27.

193) 渋谷(1996) p. 445.

194) 東京府が明治政府に兵舎とするように願い出るのは違和感があるが、おそらく当時、武家屋敷には空き家が多く、空き家となって治安が悪くならないようにということだと推測される。

195) 東京都編(1965) p. 149-150.

用するように通達する<sup>196)</sup>。

鹿児島藩の歩兵4大隊と砲兵4隊、山口藩の歩兵3大隊、高知藩の歩兵2大隊と騎兵小隊、砲兵2隊を御親兵とする。歩兵の編制は、1小隊が60人、1中隊は2小隊(120人)、1大隊は5中隊、600人からなる。上官は定員外である。砲兵隊は砲2門で1分隊、3分隊で1隊となっている。

4月15日、鹿児島藩兵がまず着京する。同月21日、知藩事 島津忠義が西郷隆盛とともに東京に到着する。ついで5月18日、高知藩兵が着京する。山口藩兵が、東京に到着するのは5月末である。毛利元徳が東京に到着するのは、6月12日である。山口藩は藩内の動揺と毛利慶親の死で、木戸孝允が出京をいやがるのを、大久保、井上が説得している<sup>197)</sup>。

4月23日、鎮台を東山道(本営石巻)、西海道(本営小倉)におき、5月25日には教導団を置いている。御親兵、2鎮台、教導団をおき、各藩の反対に備えたうえで廃藩置県をおこなう。

明治4年(1871)7月14日、在京56知藩事を宮中にあつめて、廃藩置県の詔書をだす。この結果、261藩から3府302県になる。同年11月13日、全国の県を改廃して、同月22日、3府72県となる。

8月20日 東山道(本営石巻)、西海道(本営小倉)の2鎮台を廃止、東京、大阪、鎮西、東北に4鎮台を置く。明治5年(1872)3月9日、親兵を廃止して、近衛兵をおき、明治6年1月には、徴兵令を制定している。

明治維新のキーワードは天皇親政である。廃藩置県をおこなうのは天皇中心の国家にかえるためである。天皇中心の国家にするためには、宮中の意思統一が重要である。三条、岩倉、木戸、大久保、西郷のいうことであれば、従わなくてもいいが、天皇のみことのりであれば、これにさからうことはできない。征夷大將軍徳川慶喜でもできないことであった。三条、岩倉、木戸、大久保、西郷等には到底できないことである。明治天皇がど

196) 鹿児島県維新史料編さん所編(1980)第7巻, p. 13.

197) 西郷隆盛全集編集委員会編(1978) pp. 108-112.

のようなみことのりを発するののかということは、重要なことである。この意味で、明治維新は宮中でおこなわれたものであるといえる。したがって、明治天皇の近くに仕える人がどのような人であるのかということは、最大の重要事となる。このような認識のもとに、廃藩置県に先立つ、明治4年7月4日、民部大丞吉井友実が宮内大丞として任用されることになる。吉井は、戊辰の役の軍功により、賞典禄1000石を授与されている。もちろん、当初は宮内省、内廷の改革をするために、公卿の徳大寺実則を宮内卿として、この任にあたらしめようとしたが、徳大寺はこれを固辞する。同じ公卿仲間のおおくを免職にして、これまで宮中の人がみたことがない人をこれに替えようというのだから、断わるのが当然である。明治天皇、三条、岩倉を納得させる一段階として徳大寺を指名しただけであって、木戸、大久保、西郷は断わるのを予想していたとおもわれる。この結果、吉井の登用となる。宮中刷新を考えた時点で、吉井の登用は決められていたと推測される。

これまでの公卿にかえて、士族12人を抜擢して侍従とするという項目を含む、吉井の改革案<sup>198)</sup>ができる。これにもとづき、7月20日、徳大寺実則を宮内省出仕とし、鹿児島藩士村田新八が宮内大丞に、7月24日、米田虎雄が熊本県権大参事から、高知藩士高屋長祥が兵部権大丞からそれぞれ侍従に任命されている。

明治4年(1871)7月28日、高島は侍従<sup>199)</sup>となり、正6位に授せられ

198) この改革で、宮中に入るものは、諸藩の「剛健質実」のものだけが選ばれている。近世名将言行録刊行会編(1934)p.360。また、森(2001)p.23、は「西郷一人の仕事ではなかったが、(略)まだ一少年におわした明治天皇に、野武士のような荒削りの人々を接近せしめて、宮中に剛健な気分を漲らせたことなど、今日から考えても、愉快に堪えないが、そうした思切った改革は、西郷が在って、始めて成し得たものであ」と書いている。

199) 『太政官日誌』には記載がない。金井他(1981)p.246では、7月27日の任命になっている。

る。このとき高島は、高島昭光で任命されている。明治5年(1872)4月30日、侍従番長のときも、高島昭光で辞令を配布されている。明治3年7月の横山正太郎の親戚が国許に送った手紙<sup>200)</sup>には、高島軻之助と書かれているので、「昭光」と「軻之助」をこの時期には併用していたことになる。

7月28日、免職となるのは、侍従では、園池公静、三條西公允、裏松良光、東園基愛、入江為福、綾小路有良である。次侍従では、慈光寺有仲、豊岡健資、旧高知新田藩主山内豊誠、旧米沢新田藩主上杉勝道、冷泉為柔が免職となる。

高島が侍従となった日に、旧河内狭山藩主北条氏恭<sup>うじゆき</sup>が次侍従から侍従に任命される<sup>201)</sup>。北条は、藩財政逼迫のため、狭山藩知事の辞職を願い出て、廃藩置県にさきだつ明治2年12月26日に知藩事を免職となり、狭山藩は堺県に合併されている。そして、明治3年11月10日、北条は次侍従に任命されている<sup>202)</sup>。旧庄内藩主酒井忠篤が従5位に叙せられるのは、明治5年1月6日であり、陸軍少佐に任命されるのは同年2月30日である<sup>203)</sup>。明治4年7月28日、次侍従には、正4位五條為栄と佐賀藩士島義勇が任命される。島は、皇道復古の勲功により賞典禄100石を授与されている。さらに裏松良光、東園基愛、入江為福、綾小路有良が、侍従から降格されて任命されている。

8月に、鹿児島藩士高城重信が次侍従に任命され、9月には山口藩士河野通信<sup>まさよし</sup>、福井藩士堤正誼が侍従に任命されている。

9月29日に次侍従を廃して、島義勇以下9人の次侍従を侍従としている。10月15日、東久世通禧<sup>みちとみ</sup>が侍従長に任命される。11月9日、高知藩士片岡利和、そして山口藩士有地品之允は陸軍少佐から、侍従となる。河野

200) 鹿児島県維新史料編さん所編(1979)第6巻, p. 662.

201) 宮内庁(1969)第2, p. 506.

202) 勝田(2000)pp. 91-92, 杉本編(1892) p. 61.

203) 杉本編(1892) p. 68.

通信は侍従を罷免される。12月に鳥義勇は侍従を辞めて、秋田県権令となる。また西四辻公業は、明治5年1月20日大阪府知事から侍従に任命されている<sup>204)</sup>。

民部大丞吉井友実を宮内大丞とするのは、大久保であり、村田新八を宮内大丞にするのは、西郷だとおもわれる。ではだれが高島を侍従に抜擢したのであろうか。考えられるのは、吉井友実が高島を推薦し、それを大久保、西郷が承認し、さらには木戸孝允、岩倉具視、三條実美が承認したということと推測される。

吉井友実は、高島とおなじ方限、高麗町の出身である。もちろん、西郷が考えた明治天皇側近として望ましい資質を、高島が有していたのはまちがいない。望まれた資質とは、剛健にして清廉なことである。さらには、奥小姓としての経験も多少は考慮されたかもしれない。

明治4年8月には侍従の分担が決められ、高島は御乗馬掛かりとなる<sup>205)</sup>。明治天皇が乗馬をしたという記述が『明治天皇紀』の随所に散見される。また、軍隊を閲兵するのに、明治天皇が騎乗ではなく、馬車でおこなった場合は、陸軍の都合により馬車で閲兵したという断り書きをいれてある。たとえば、明治2年4月28日、明治天皇が隔日に馬に乗ると聞いた中御門経之は、乗馬を毎月3・8の日に限定することを、岩倉具視に書き送っている<sup>206)</sup>。また明治7年1月8日の陸軍初の閲兵式では、「但し陸軍省の都合により騎馬臨御を改め、馬車に乗御あらせらる」とあり、馬車にしたのは陸軍の要請であることわっている<sup>207)</sup>。このことから明治天皇が、乗馬をするということを明治政府はいかに重要視していたかがうかがえる。理由は、軍人天皇としての必要事項ということであろう。

204) 宮内庁(1969)第2, pp. 506-507. 金井他(1981) p. 246.

205) 宮内庁(1969)第2, p. 524. 高島のほかに米田虎雄, 綾小路有良, 東園基愛, 裏松良光, 高城重信が御乗馬掛である。

206) 宮内庁(1969)第2, p. 109.

207) 宮内庁(1969)第3, p. 186.

赤坂仮皇居時代のことである。明治天皇は乗馬が好きで、午前の公務が終わると、午後は乗馬だったようである。天皇は、人名と馬名を書いて、それを侍従の日野西資博に渡す。日野西が他の侍従にそれを伝えて、指名された人がお供をしたようである。字がわからないときに質問すると叱られるので、想像して伝えたとのことである。暗くなるまで乗馬を楽しんだようである。同時に、臣下のものはだか馬にのせたり、鐙のない馬に乗せたりして、楽しんでいたようである<sup>208)</sup>。赤坂仮皇居時代、高島は侍従番長である。はだか馬にのったことがあるのか。高島は侍従のなかでも乗馬が得意だったのかもしれない。つぎのように高島はかたっている<sup>209)</sup>。

「明治になってからも東京に来た我等初め、後に居る者でも大抵家を借りるか、下宿して居る位じゃのに、桐野許りは例の闊達な流儀で、今の湯島の岩崎の家だな、彼の辺へ夫れは夫れは大きな家を借込んで済して居た。其の家が亦た馬鹿に広くて、馬場があったので、我等は能く馬を馴らしに遊びに往ったものじゃ」。

桐野が住んでいたのは、本郷湯島の越後高田藩 15 万石の榊原政敬の下屋敷、3,000 坪である。桐野は、明治 4 年 7 月 28 日、高島が侍従になったときに陸軍少将になっている。篠原国幹、野津鎮雄が陸軍少将になるのは、こののち同年 9 月 2 日である<sup>210)</sup>。

姫路藩、伊予宇和島藩、大和郡山藩、越後高田藩、淀藩、加賀大聖寺藩、陸奥八戸藩、常陸石岡藩、上野吉井藩の藩主が、明治 2 年 6 月 17 日から 24 日にかけて、藩知事に任命されるまえの官位は、侍従である<sup>211)</sup>。このときの侍従職は形式的なものではあるが、藩主に与えられた官位であ

208) 日野西 (1952) pp. 37-39.

209) 高島 (1910) p. 48.

210) 鹿児島県維新史料編さん所編 (1980) 第 7 巻, p. 345, p. 441.

211) 東京都編 (1961) pp. 830-837.

る。そして、侍従の実務は天皇の世話役である。

侍従職は、明治になっても旧藩主が任命されている。さきにふれたように河内旧狭山藩主北条氏恭は明治4年7月27日に、次侍従から侍従に任命されている。明治8年4月12日には、旧出石藩主仙石政固が侍従に任命され、翌年の明治9年3月8日には旧肥前鹿島藩主の鍋島直彬なおよしが侍従に任命されている<sup>212)</sup>。

明治6年5月15日、島津珍彦うづのこ(久光の3男)を侍従に任用している。しかし珍彦は出仕せず、6月22日に願いによって、侍従を免官になっている<sup>213)</sup>。これから考えられることがふたつある。ひとつは、島津久光の3男、重富島津家の当主が侍従職に任用されることは名誉なことであるということである。越後高田藩15万石の藩主榊原政敬は、元治元年5月5日に侍従に任用されている<sup>214)</sup>。徳川時代の官職が形式であったにせよ、任用されるのは藩主クラスということである。この点でも、高島の侍従職登用は、いかに革新的なことだったかということがよくわかる。この人事を挙行した木戸、大久保、西郷の覚悟のほどがみえるようである。ふたつには、珍彦を侍従職に任用することによって島津久光とのつながりをもとうとしたことである。この策は成功しないで、珍彦にかわって、明治6年7月7日、従3位高辻修長が侍従となり、御書籍掛・御服掛を命じられている<sup>215)</sup>。島津珍彦が、男爵に列するようになるのは、明治22年3月2日である<sup>216)</sup>。

高島が侍従のときのエピソードがある。宮中改革がどのようなものであっ

212) 金井他(1981) pp. 246-247.

213) 宮内庁(1969)第3, p. 68. 金井他(1981) p. 246では5月14日付けである。

214) 杉本編(1892)中 p. 356.

215) 宮内庁(1969)第3, p. 99. 金井他(1981) p. 246, 高辻が侍従となるのは、6月29日である。

216) 宮内庁(1972)第7, p. 233.

たのがよくわかるものである。ひとつは、高島が侍従となつてはじめて参内したときに、背後から汚いやつと塩をかけられたというエピソードがある。これを高島が我慢した<sup>217)</sup>、というものである。これからうかがえるのは、侍従あるいは次侍従として残留した公卿には、高島という存在は、塩を振り掛けるほどの存在だったということである。従来の宮中には存在しない人物が侍従になり、旧来からの侍従の多くはお役ごめんとなった鬱屈を、高島にむけたということであろう。同じようおもいを明治天皇もしていたとおもわれる。おそらく明治天皇は、環境の変化に戸惑い、驚いたこととおもわれる。明治天皇はこれを拒否することなく受け入れ、享受している。宮中大改革で、もっとも我慢したのは、高島でもなく、公卿でもなく、おそらくは明治天皇だったと推測される。

ふたつめは、明治天皇が楠正成の役で、高島は足利尊氏の役をやらされ、木剣で幾度もたたかれた。いたさに我慢がならず、打ち返す気配を見せると、明治天皇はきょうはもうやめようといって、さっさと引き上げたというエピソードである<sup>218)</sup>。明治天皇は、嘉永5年(1852)9月22日、新暦では11月3日の生まれであるので、高島が侍従となつた明治4年(1871)には、かぞえて20歳である。高島はかぞえて28歳である。したがって、このはなしは、10歳前後のこどものはなしではなく、かぞえて20歳をこえる青年とかぞえて30歳前後の青年とのはなしである。明治天皇は少年時代に京都御所で、おそらくこのような遊びをしたことがない。したがって、これは西郷、大久保、木戸の方針であつたとおもわれる。

みつめは、明治天皇が高島等の侍従たちとどのように接していたかということである<sup>219)</sup>。

---

217) 大月(1902) p. 156.

218) 渡辺(1958)上, p. 96. 渡辺はこのエピソードの出典をあきらかにしていない。

219) 高島鞆之助謹話(1912) pp. 33-34.

「自分は酒量甚だ浅く畏れ多き事ながら何時も逃げ隠れる様にして居た。所が彼の山岡鉄舟や中山大納言の如きは却々の酒豪で、斗酒猶辞せずと云う豪傑であったから聖上には何時も酒宴を開かせ給う毎に、此等の面々を御召し寄せになつては、御機嫌殊に麗しく、勇壯な御物語りを御肴として玉杯の数を重ねさせ給うを此上なき御楽しみとせられた。(略)

(略) 夜更くるまで侍臣を御相手に種々の御物語りに耽らせ給うこともある。斯様の時にイザ御寝と云う事となれば急に御奥より夜の御寝具を運び、吾々侍臣は御廊下に殿居をして一夜を明かすのは決して珍しき事ではなかった。」

高島の話からうかがえるのは、明治天皇は、高島等、旧鹿児島藩士が子ども時代に鹿児島で受けた教育(郷中教育)を青年明治天皇に経験させていることである。明治天皇と高島とのふたつめとみつつめのエピソード、木剣での遊び、若者がたむろしての談論風発は、まさしくその一環であるとおもわれる。

高島自身が述べているように、高島は酒はだめである。どの程度だめかという、樺山資英がはなしている<sup>220)</sup>。

「高島は生来酒は一滴もやらぬ」

明治国家は天皇中心の国家である。明治天皇の近くに仕える侍従職は、国家がいまだ定まらない時期において、非常に重要な役柄であったとおもわれる。なぜなら、侍従は天皇の意思決定に参加できる立場である。天皇は天皇を取り巻く環境のなかで意思形成をしていく。天皇は個人であるが、朝廷を考えると、それは天皇を中心とする組織である。そして、朝廷

220) 樺山資英伝刊行会(1942) p. 630.

の中で、天皇は意思決定をしていく。侍従は朝廷を形成する要素であり、天皇といつも一緒にいる役割である。天皇の意思がぶれないように、朝廷の意思は統一されている必要がある。そのようなときに、なぜ高島がそのように重要な役割（侍従職）に選ばれたのか、確定的なことはわからないが、西郷、大久保に信頼されていたことはまちがいない。とくに吉井は、高島を信頼していたと推測できる。

## 11

江戸を東京と改めるのは、明治元年7月17日である。明治天皇は、同年9月20日に京都を出発して、東海道をくだって、同年10月13日に東京城に到着している。そして同年12月22日には東海道をのぼって、京都御所に帰っている。同年10月13日、明治天皇が東京を訪れるのにさきだあって、江戸城を東京城と改称する。明治2年2月24日、太政官を東京に移し、同年3月28日、明治天皇は再度東京を訪れて、東京城を皇城と改称し、以後東京に留まり続けることになる。明治21年10月27日には、宮城と改称される。

石高800万石から70万石に削減され、徳川宗家は静岡移住となる。その結果、江戸の市街地の6割を占める武家地は、大名の引き上げ、旗本の四散により、荒れ放題となる。

このため、東京府知事大木喬任は、旧武家地のうち300万坪に桑と茶をうる「桑茶政策」を始める。明治2年のことである。青山の16万坪を筆頭に、小石川14万坪、麻布12万坪、雑司ヶ谷9万2000坪、白金、牛込、麴町、下渋谷等に桑畑、茶畑ができる。

翌年には、桑・茶の7～8割が枯れてしまう。このため、東京府知事由利公正は、明治4年(1871)、「桑茶政策」をやめる。それでも桑茶園はかなり後まで残る。とくに「牧場」は明治末まで残る<sup>22)</sup>。

明治2年2月5日、京都でも各藩の藩邸が荒れたため布告を出している。各藩邸で荒蕪しているものは、桑畑、茶畑にするか、売却するか、上地にするかを決めて京都府に届け出るように布告している<sup>221</sup>。これよりのち明治6、7年には、京都御所の瓦は落ち、壁は落ち、御所内は草原状態となり、二条城には桑が植えられ、ともに売りに出されている。売値は御所が5,000円、二条城が10,000円である。それでも高すぎるといわれ、買い手がつかなかった。というのも、当時、公卿屋敷などはただ同然で獲得できたものもあったようである。御所が売りに出されているのを聞いた岩倉具視が、これを中止させている<sup>223</sup>。

明治5年(1872)1月4日、和歌山藩知事徳川茂承<sup>もちつぐ</sup>が赤坂の旧中屋敷の一部、94,745坪余を皇室に献上する。ただし『南紀徳川史』には、上地と記載されている。同年2月17日にこれを認め、3月23日、赤坂離宮とし、皇太后御所とすることをきめる<sup>224</sup>。明治10年(1877)に東京府に提出した旧藩邸沿革表では、和歌山藩中屋敷赤坂邸の坪数は143,045坪である<sup>225</sup>。

皇太后の東京移住が決まるのは、明治5年(1872)3月5日である。同年3月22日に、皇太后は京都を出発する<sup>226</sup>。同年4月11日、皇太后は品川駅に到着し、鳥山金右衛門宅に宿泊する(明治天皇も2度の江戸下向のさ

221) 鈴木(2006) p. 135. 日本人が牛乳を飲むようになり、牧場が必要となる。

222) 鹿兒島県維新史料編さん所(1978)第6巻, p. 141.

223) 下橋(1979) p. 43.

224) 宮内庁(1969)第2, p. 659では、上屋敷であるが、堀内(1933) p. 849によると、正しくは中屋敷である。和歌山藩の上屋敷は麴町邸である。文政6年、麴町邸炎上後は藩主の住居邸となる。宮内庁(1969)第2, p. 659に上屋敷と記載されているのは、明治11年10月、東京府に提出した書類に赤坂邸を上屋敷、麴町邸を中屋敷として届けたためである。

225) 東京都編(1960) p. 479. 堀内(1933) p. 942によると145,381坪余である。

226) 同上, pp. 653-654.

い、おなじところに宿泊している)。皇太后を出迎えるため、明治天皇は乗馬で品川まで行幸している<sup>227)</sup>。皇太后は、同年4月12日、赤坂離宮に入る。同年5月19日、明治天皇は赤坂離宮を始めて訪れて、皇太后と対面している<sup>228)</sup>。

明治5年(1872)2月26日には、和田倉門内の兵部省添屋敷(旧会津藩邸)から出火し、築地・京橋・銀座を含む30万坪、2900戸を焼き払う大火が起る。これを機に明治政府は火災予防策のひとつとして、銀座をレンガの町として再建することを決める。このとき、高島は30円を寄付して、明治14年(1881)12月28日にこの賞として木杯1個を下賜されている<sup>229)</sup>。

## 12

高島が侍従番長となるのは、明治5年(1872)4月30日である。侍従番長のときも、高島昭光で辞令を受けている<sup>230)</sup>。

明治5年(1872)5月23日午前4時、明治天皇は、大阪、中国、西国視察のため、皇居をでる。そして、午前5時30分、浜離宮波止場から端船に乗り、6時30分に、品川沖で軍艦龍驤に乗る。祝砲21発を放って、8時40分、東京をあとにする。西郷隆盛、西郷従道、川村純義、徳大寺実則、吉井友実等が随行した西国御巡幸(5月23日から7月12日まで)である<sup>231)</sup>。

このときに、興奮した島義勇はガラスに気がつかないで頭を打ち付け

---

227) 日本史籍協会編(1982) p. 44.

228) 同上, p. 686.

229) 杉本編(1895)下, p. 228.

230) 金井他(1981) p. 245. 石井編(1981)第6巻, p. 90.

231) 随行者50人、近衛兵一小隊の護衛という陣容である。この随行者のほとんどが薩摩出身者である。南日本新聞社編(1967)中, p. 80.

て、ガラスを割り、頭にけがをする。これを鳥は、祝砲にあたったと誤解して、大砲をとめると連呼したそうである<sup>232)</sup>。

伊勢、大阪、京都、下関、長崎、熊本、鹿児島、丸亀、神戸を、海路で巡幸して、7月12日横浜に上陸し、汽車に乗車して品川までいき、帰京する<sup>233)</sup>。侍従番長高島鞆之助も随行している<sup>234)</sup>。また戊辰戦争時の遊撃二番隊長西寛二郎も陸軍大尉として随行している。これが、明治天皇の六大巡幸の最初の巡幸である。前年の明治4年9月には、廃藩置県に反対する不満分子鎮撫のために、西郷従道、吉井友實が鹿児島に派遣されている<sup>235)</sup>。廃藩置県に対しては、明治維新に貢献した西国諸藩の不満が大きかったとおもわれる。したがって、これを鎮撫するための行幸とおもわれる。船旅という限られた空間での明治天皇、西郷隆盛という中枢の人々との身近な交流は約2ヶ月間におよぶ。宮中での交流よりもはるかに緊密度の高いものであったと想像できる。たとえば、船内における食事時間を、人数が多いため2回に分けているのも、限られた空間という制約のためである。この期間、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允等は欧米使節団として渡欧中である。

明治天皇の御召艦が龍驤である。高島は侍従番長として、御召艦に乗船している。吉井友実も龍驤艦に乗船している。高島と吉井は約2ヶ月間、同じ船に乗っていたことになる。船中、2人はさまざまなことを語り合ったのかもしれない。龍驤艦長は伊東祐磨大佐である。日進艦には、西郷隆盛が乗船する。筑波艦には、森田誠一ほか9人の兵学寮生徒を乗せている。これが兵学寮生徒の実習航海の最初である<sup>236)</sup>。

232) 相良 (1926) p. 32.

233) 宮内庁 (1969) 第2, pp. 691-731. このとき大阪では、市民が万歳を唱えて歓迎したといわれるが、真偽は明らかでないとの記述がある。万歳を唱えていれば、このときが万歳の最初となる。多木 (1988) p. 75.

234) 『枢密高等官履歴』 pp. 137-138.

235) 宮内庁 (1969) 第2, pp. 530-531.

236) 海軍歴史保存会 (1995) p. 89.

明治4年の廃藩置県するとき、各藩より艦船が明治政府に献納されている。龍驤は、熊本藩から献納された排水量2,530トンの軍艦である<sup>237)</sup>。護衛する艦は、日進(1,468トン)、春日(1,269トン)、筑波(1,578トン)、孟春(357トン)、雲揚(245トン)、鳳翔(121トン)の6艦である。日進と孟春は佐賀藩から、春日は鹿児島藩から、雲揚と鳳翔は山口藩から、廃藩置県によりそれぞれ明治政府に献納されたものである。筑波は明治政府がイギリス人から購入したものである。船の速度は、春日艦で17ノットである。海図のない航海となるため、第一丁卯(125トン)、第二丁卯(125トン)は水路測量艦として同行し、第二丁卯艦には兵部省海軍水路局長、柳植悦<sup>ならよし</sup>海軍大佐が乗船している。第一丁卯、第二丁卯は山口藩から明治政府に献納された軍艦である<sup>238)</sup>。有功丸は護送船であり、近衛兵一中隊が乗船し、艦隊の後備についている。合計10隻、乗組員総数1,138人の艦隊である。この西国巡幸を、海軍は特別大演習と遠洋航海とをかねたものと位置づけていた<sup>239)</sup>。

明治天皇はこのときはじめて軍艦に乗船したと尾佐竹猛は記述しているが<sup>240)</sup>、これよりまえ明治5年4月28日に、浜離宮から汽船に乗り、品川沖で龍驤艦に移り、浦賀港まで試乗している。1泊して、翌29日には浦賀港から浜離宮に上陸している<sup>241)</sup>。さらにそれ以前、明治4年11月21日、浜離宮から汽船(弘明丸)に乗り、品川沖で龍驤艦に移り、横須賀の造船所を見学するため横須賀まで乗艦している。そして同月23日、東京丸に乗艦して浜離宮に上陸し、皇居に帰っている<sup>242)</sup>。

巡幸の途上において、国事のために亡くなった人たちを弔うことは重要

237) 同上, pp. 59-60.

238) 「海軍」編集委員会編(1981) pp. 23-24.

239) 海軍歴史保存会(1995) p. 89.

240) 明治文化研究会編(1967) p. 8.

241) 日本史籍協会編(1982) pp. 44-45.

242) 同上, pp. 42.

な行事である。下関の桜山招魂場に、明治天皇が参拝する予定だったが、干潮のためいけなくなる。かわりに高島が勅使として派遣され、幣帛料 50 円を納めている<sup>243)</sup>。明治 5 年 6 月 12 日のことである。

「 宣命

汝等乾綱の不振皇威不宣を憂い盡忠致死人をして感奮興起せしむ朕今  
巡幸追感殊に深し扱て侍従番長正六位高島鞆之助を遣し汝等の墓を弔  
し且金幣を賜う

明治五年壬申六月十二日 」

西国巡幸をおえての帰路、明治 5 年 7 月 12 日、強風のため品川沖に着艦するのは困難との判断で、横浜港に午前 7 時 15 分、急遽入港している。このとき、徳大寺実則宮内卿、河瀬眞孝侍従長、吉井友実宮内少輔、児玉愛二郎宮内少丞、先導の侍従数人のみがつきしたがって、港の近くにあった神奈川県庁まで歩いている<sup>244)</sup>。高島の名はない。高島は侍従番長ではあるが、「先導の侍従数人」のひとりであった可能性はある。このときの神奈川県参事は大江卓<sup>たかし</sup>である<sup>245)</sup>。神奈川県権令陸奥宗光は、同年 6 月 18 日に大蔵省租税頭転任となっているが、このときはまだ権令の事務も兼務していた。大江卓が権令となるのは、同年 7 月 14 日である<sup>246)</sup>。明治天皇

---

243) 東京大学史料編纂所蔵版 (1998) p. 297, 明治文化研究会編 (1967) pp. 283-284.

244) 明治文化研究会編 (1967) p. 8, p. 290, 公爵島津家編纂所編 (1968) 下, pp. 1060-1062.

245) 大江は、高知県宿毛市の南隣り、大月町の豊後水道に面した戸数百戸あまりの柏島の代官齊藤弘の子として、弘化 4 年 (1847) 9 月 21 日、生まれる。名は卓造である。その後、土井家の養子になり、後藤象二郎の女婿となる。伊藤 (1929) pp. 460-461, 日本史広辞典編集委員会編 (1997) p. 294.

246) 石井編 (1981) 第 6 巻, p. 126, p. 136.

は、まず県庁内の裁判事務を扱う部屋に通され、構内にあった拘置所を見学し、未決囚にもあっている。県庁の役人の誰かが、のぞきみをして、大きな目の男にしかられた、あれは西郷隆盛であろうというくだりがあるが、西郷は7月5日に四国丸亀から従道、野津とともに勅命をうけ、明治天皇よりもさきに東京に帰っているのです、西郷はここにはいない。このとき明治天皇が水を求め、ガラス瓶に入れて水を差し出したところ、このガラス瓶を明治天皇が気に入って、宮中に持ち帰っている。このガラス瓶は、翌年の皇居の火事で焼失する。その後、用意の整った県庁主賓室に移り<sup>247)</sup>、午後5時に神奈川県庁から馬車で停車場まで行き、横浜から汽車を利用して7時に品川に到着している<sup>248)</sup>。品川から馬車にのり、8時に皇居にかえっている。このときが明治天皇の汽車に乗車した最初である。

これよりまえ明治5年7月1日、嵐にあい、横浜に停泊しているペルー国船マリア・ルース号の、清国人苦力虐待について取調べを、外務卿副島種臣が命じている。神奈川県参事は大江卓であり、税関長は中島信行、税関翻訳掛は星亨と神鞭知常<sup>ともみち</sup>である。大江はマリア・ルース号事件特別法廷の裁判長となり、9月13日、清国人苦力229人を清国領事に引き渡している。これにペルー側が異議をとなえ、ロシア皇帝アレクサンドル3世に、日本とペルーの裁定を依頼する。明治8年6月、奴隷売買は違法であり、その開放は正当である、日本はペルーに損害を負担する必要はないとの裁定をえる。

## 13

明治6年5月5日午前1時20分、紅葉山女官房室から失火し、皇居を

247) 相良 (1926) pp. 32-33.

248) 明治文化研究会編 (1967) p. 8, p. 290. 鉄道開通式はまだおこなわれていない。鉄道開通式では、明治天皇は参議西郷隆盛等とともに汽車に乗車している。

焼失する<sup>249)</sup>。午前4時30分に鎮火する。この紅葉山の房室は、明治4年4月に建築されたもので、約200人の女官が住んでいた<sup>250)</sup>。紅葉山局下婢部屋前の柴小屋に、失火の前日4日の夕方、米屋が藁灰をいれておいたのに、湿らす程度の水をかけて、なお注意するように指示して帰宅したが、下婢が藁灰注意の指示を忘れたために藁灰が燃え上がったと新樹典侍高倉<sup>かずこ</sup>寿子は報告している。下婢3人のうち1人はなくなり、2人がけがをしている。亡くなった人には30円、けがをした人には15円が渡されている。ところが、高倉寿子の報告に添付されている新樹典侍年寄、菊岡の報告内容はすこし異なる。米屋は京橋稲荷新道澤田屋文吉で、文吉は新樹典侍下婢の左加江に、今日つくったばかりの藁灰なので火の元に十分注意するように伝えたくて渡し、左加江は宮内省夫卒の梅沢清一郎に新樹典侍部屋に運ぶように依頼をし、梅沢清一郎はそれを新樹典侍部屋まで運び、障子の中から下婢に物置の中に入れるように指示されて、そのようにして帰ったと報告している<sup>251)</sup>。ただし、新樹典侍高倉は宿直で、当時留守であると報告している。菊岡の報告書が真実であるならば、文吉の注意したことが、左加江のところで連絡されなかったのか、それ以降の誰かが連絡しなかったのかどちらかであるとおもわれる。下婢の誰かが、菊岡なり、高倉に報告していたなら、火元に注意する必要性を彼女等に伝えたのは、下婢になる。そうであれば下婢が忘れたということは確率が低い。菊岡の報告では、注意の必要な藁灰が柴小屋にあったことを菊岡はしっていたのか、しらなかったのかどちらかわからない報告をしている。これに対して高倉の報告には、藁灰が危険なのを知っていて、藁灰に水を打ったとある。高倉は文吉から直接聞いたのではない。注意したのは下婢である。下婢が忘れなかったとすれば、水を打ったので大丈夫と思ったけれど、打ち水が十

249) 宮内庁 (1969) 第3, pp. 61-62.

250) 原・吉田編 (2005) p. 354.

251) 明治文化研究会編 (1967) p. 311-312.

分ではなかったということになる。藁灰は高倉寿子の部屋に運ばれたものである。火元最高責任者は高倉寿子である。このときなくなったのは、菅権命婦西西子の針女まきこくに（東京府士族富田光明の子ども）と記載されている。軽症の2人は、軽いやけどをしたのが菅権命婦西西子の針女まき、軽いけがをしたのが山吹掌侍の針女さたということである<sup>252</sup>。

女官の職位は、宮中改革の一環として、明治4年7月24日に改正され、尚侍（従3位相当）、典侍（従4位相当）、権典侍（正5位相当）、掌侍（従5位相当）、権掌侍（正6位相当）、命婦（従6位相当）、権命婦（正7位相当）、女孺（従8位相当）、権女孺（正9位相当）、雑仕（大初位相当）、下仕（少初相当）となっている<sup>253</sup>。典侍は7人で、大典侍、新大典侍、権中納言典侍、宰相典侍、按察使典侍、新典侍、いままいり今参がおかれている。掌侍（内侍ともいう）は4人で、勾当内侍、小式部内侍、中将内侍、右衛門内侍である<sup>254</sup>。上級女官（「旦那さん」という）1人に、針女、下女など（「ご家さん」という）3、4人の下級女官がつく。これは典侍以下の女官に仕える私的な使用人であり、針女という<sup>255</sup>。尚侍は職位だけがあって、担当者置かない慣わしであり、また新樹典侍の新樹というのは、高倉典侍の源氏名である。典侍は源氏名をつけることになっていて、公卿の出自のものは2字、武家・社家の出自のものは1字の源氏名をつける慣わしである<sup>256</sup>。源氏物語の巻名、または類似の名をもちいるところから源氏名という<sup>257</sup>。高倉寿子が失火当時典侍ということは、従4位のはずであるが、高倉は明治6年6月25日に、正5位から従4位を授けられている<sup>258</sup>。こののち高倉

252) 宮内庁（1969）第3, p. 62. 東京市役所編（1916）pp. 553-554. 同書では、菅「命婦」と記載されている。

253) 石井編（1981）第5巻, p. 286.

254) 下橋（1979）pp. 16-17. 同書, p. 67 に、高倉寿子は新典侍と記載されている。

255) 同上, pp. 372-373.

256) 原・吉田編（2005）p. 354.

257) 下橋（1979）p. 372.

258) 石井編（1981）第6巻, p. 403.

は、明治23年の皇后の大阪行啓に供奉している。また、明治天皇が重態に陥ってからなくなるまで昼夜看護の御用を勤めたということである<sup>259)</sup>。

明治天皇の皇后、美子は、<sup>はるこ</sup>一条忠香の3女である。美子が入台するとき、付き添って来たのが高倉千枝子（のち高倉寿子）である。女御の上臈として宮中入りして、のちに女官長となっている<sup>260)</sup>。したがって、高倉は皇后美子の側近中の側近である。

明治4年8月1日、女官は一旦全員罷免され、あらためて採用されている。このときに権掌侍以上の女官の辞令は、皇后美子みずから授与するようになる。また、明治5年4月には、孝明天皇時代以来、後宮で権力をもっていた広橋静子、高野房子の兩典侍以下36人を罷免するとともに、天皇付き女官と皇后付き女官の区別もなくす。以降、後宮の権力は皇后に帰することとなる<sup>261)</sup>。

ところで、元和元年（1615）4月以来、紅葉山は徳川氏歴代の霊屋があったところである。明治政府は、この霊屋の撤去を明治元年（1868）12月19日に徳川家達に命じている。霊屋、鳥居等の撤去は、明治2年（1869）3月から始まり8月に終わる。検分をするのが同年11月22日である<sup>262)</sup>。明治4年、紅葉山女官房室をこの跡地に建てたことになる。明治4年11月における紅葉山女官房室の建坪は2,106坪9分7厘である<sup>263)</sup>。

この皇居の火事は、宮中大改革がおこなわれた翌年、すなわち高島が侍従になって1年目のことである。

皇城炎上の献金総額、29万8,579円余である<sup>264)</sup>。高島はこのとき100円を献金し、明治17年3月28日にこの賞として宮内省から銀盃1個を下賜

259) 渡邊（1912）前巻，p. 15.

260) 原・吉田編（2005）p. 82, p. 354.

261) 同上，p. 354.

262) 東京市役所編（1916）pp. 166-168.

263) 同上，p. 522.

264) 宮内庁（1969）第3，pp. 61-62, p. 68, p. 355.

されている<sup>265)</sup>。このとき開拓監事であった堀基は、30円を献金して、明治17年11月11日に木盃1個を下賜されている<sup>266)</sup>。越後高田藩の旧藩主、榊原政敬は2,000円の献金をして、明治17年3月10日に銀盃3組を下賜されている<sup>267)</sup>。島津久光と島津忠義は連名で、明治6年7月8日に献金願いを太政大臣三條実美にだしている。献金額は、1万両(1万円)である。これに対して、明治17年3月6日、久光は4千円を献納したことに対して、金盃1個を下賜されている<sup>268)</sup>。のこり6千円は忠義の献金額である。これをみると、献金額の大きさによって下賜されるものがとなり、それを授けられる時期も異なるようである。

西郷隆盛の献金はつぎのようになっている。明治6年5月10日、西郷は、元帥から陸軍大将となり、参議を兼任する。その結果、7月までは陸軍省から給与をうけとり、8月からは正院から受け取るようになったようである。西郷は給与の半分を献金していたようで、7月分は陸軍省から200円を、8月分は正院から250円を献金分として差し引くように、篠原国幹に手紙で依頼している。西郷隆盛の給与は、7月400円、8月には500円ということである<sup>269)</sup>。

教部省では、勅任官は月給の4分の1、奏任官は月給の5分の1、判任官は月給の6分の1を献金することに決めている<sup>270)</sup>。

高島が皇居の火事で献金をするとき、西郷と同じようにしたのではない

265) 杉本編(1893B) p. 229.

266) 杉本編(1894) p. 52.

267) 杉本編(1892) p. 358.

268) 鹿児島県歴史資料センター黎明館(2001) pp. 741-742, pp. 753-754.

269) 西郷隆盛全集編集委員会編(1978) pp. 361-362. 解説によると、西郷は5月初旬から病気で、西郷従道の渋谷の別邸で療養中なので、献金分の差し引きかたを篠原に依頼したとある。従道に依頼すればすむことを、篠原に手紙で依頼したのは、従道よりも篠原のほうに依頼しやすかったということなのか、それとも別の意味があるのか。

270) 明治文化研究会編(1967) p. 313.

かと推測される。高島は100円の献金をしている。このとき高島の月給は200円だったのではないだろうか。明治4年9月2日、官吏の歳禄支給方法が月給制に改められている。侍従の月給は、200両（200円）である<sup>271)</sup>。このときの諸省卿の月給は500両（500円）である。明治12年の川村純義海軍卿の月給は500円であるので、明治6年の侍従の月給も100円のままだったとおもわれる。

明治12年の川村純義海軍卿の月給が500円ということは、高島のはなしとして語られている。明治13年3月、高島がヨーロッパから帰国したとき、中井弘が高島から聞いたはなしとして、同年6月3日に佐々木高行と吉井友実にかたっている。明治12年に日本を訪問し、川村海軍卿の家に寄留したイギリスの下院議員リードに、高島がヨーロッパであった話をしている。このとき、リードは川村海軍卿の月給は安すぎるといっていたと、高島が中井に告げたということである<sup>272)</sup>。

リードというのは、元イギリス海軍造船長官エドワード・ジェームス・リードのことである。扶桑、比叡、金剛の3艦製造をエーリス社（イギリス）に発注したときに、リードは設計、監督、回航までを担当し、これに尽力した。この建造費は311万5千余円、明治10年度の海軍予算は316万余円であった<sup>273)</sup>。観光旅行でリード親子が、明治12年1月16日に来日したとき、明治天皇はリードを謁見している。リードが滞在中は、海軍省が接待の役にあたっている。おそらくこのとき、リードは川村純義宅に泊まったものであろう。リード親子が帰国するさいに、同年4月9日、明治天皇は親子を引見している。リードを丁重にもてなしているのは、明治政府が、イギリスとのあらたな外交ルートを構築しようとしたためである。すなわち条約改正に障害となっているイギリス公使パークスに対抗する勢

---

271) 東京都編（1962）p. 198.

272) 東京大学史料編纂所（1977）p. 137.

273) 海軍歴史保存会編（1995）p. 238.

力を、イギリスに築こうとした結果である<sup>274)</sup>。リードが来日したのは、高島が離日する前であるので、リードとは日本で面識があったのかもしれない。高島はフランスとドイツだけでなく、イギリスにも行ったようである。ただ、明治天皇は、このときの川村純義によるリード接待方法について不満があったようである<sup>275)</sup>。

皇城炎上により、これから15年間、赤坂離宮（東京港区元赤坂）が仮皇居となる。翌年の明治7年12月23日、皇城御造営の儀が出され、造営は明治9年5月8日から5カ年計画で西の丸跡に、予算100万円でおこなうことになる。明治21年10月落成する新皇居を、宮城と称するように通達する。明治22年1月11日、移転式典がおこなわれる。総建坪12,703坪、費用560万円余とある<sup>276)</sup>。完成に17年間もかけている。しかし、事実上の造営期間は4年半とのことである<sup>277)</sup>。明治17年に地鎮祭を挙行し、明治21年10月に竣工をみている。明治17年までは、和風建築か洋風建築かで議論があり、それが決まるまでの時間が11年間要したことになる。

赤坂離宮は、明治32年7月に片山東熊の設計で、東宮御所として起工し、明治42年6月に洋風宮殿が完成する。地下一階、地上2階、453坪、経費510万円である。離宮として現在あるのは、桂、修学院離宮と赤坂離宮（迎賓館）だけである。赤坂離宮は完成してから、東宮御所として使用されたことはなく、一時的に他用途に使用されたことがあるが、なごらく空き家のままであった。それが修復されて昭和49年4月迎賓館となる<sup>278)</sup>。

明治6年7月13日、旧和歌山藩主正3位徳川茂承は仮皇居地に接続す

---

274) 宮内庁（1970）第4, pp. 596-597.

275) 宮内庁（1971）第5, p. 558.

276) 中嶋（1992）p. 46. 宮内庁（1969）第3, pp. 61-62, pp. 182-183.

277) 三宅（1950）p. 357.

278) 内川・松島監修（1986）所収、「ケース写真説明」.

る赤坂表4丁目の邸地35,187坪余を献上する。これに対して、徳川茂承に2万円が下賜されている<sup>279)</sup>。このお金は、皇城炎上によりあつまった献金からだすようにという通達を、正院は宮内省にだしている<sup>280)</sup>。

明治6年11月30日に宮内省が東京府に提出した文書によると、皇居(もと西丸)の坪数は81,287坪8分2厘余であり、吹上御苑は103,869坪6分5厘、赤坂離宮は108,873坪、浜離宮は53,149坪、永田町御用屋敷は1,826坪8合余である。皇居等の建坪は、5,566坪8分4厘である<sup>281)</sup>。

皇太后は、明治6年12月19日午前10時、赤坂の仮皇居が狭いため赤坂の仮皇居につながる青山の皇宮に転居する。ここは徳川茂承が献上した私邸を修築したものである<sup>282)</sup>。明治7年1月28日、皇太后の御所を青山御所とする<sup>283)</sup>。

明治7年2月、青山御所の地続き赤坂表3丁目4番地の2,527坪を宮内省は購入している<sup>284)</sup>。同年10月、青山御所表門前の地所、3,245坪7合9勺5才を買い上げ、448坪1分5厘は道路拡張用に、残りの2,821坪3分9厘5毛を皇宮地に組み入れている<sup>285)</sup>。

明治7年3月12日、静寛院宮(和宮)邸として、麻布市兵衛町1丁目11番地、南部栄信邸4,454坪を買い上げている。3,000坪は皇宮地である<sup>286)</sup>。

皇族の邸宅がづぎづぎに確定していく。高島は侍従のとき、どこに住んでいたのかわからない。

---

279) 宮内庁(1969)第3, p. 103. これよりまえ明治6年5月に、堀内(1933) p. 942では、3,654坪余を上地されるとある。

280) 明治文化研究会編(1967) p. 316.

281) 東京市役所編(1916) pp. 521-523, 東京都編(1964) pp. 723-724.

282) 同上, p. 176. 東京都編(1965 B) p. 173.

283) 宮内庁(1969)第3, p. 202.

284) 東京都編(1965 A) p. 314.

285) 東京都編(1965 B) pp. 173-174.

286) 同上, pp. 244-245.

「明治になってからも東京に来た我等初め、後に居る者でも大抵家を借りるか、下宿して居る<sup>287)</sup>」

高島が語っていることから推測して、明治3年に上京してからしばらく兵舎内にいて、その後下宿したか、家を借りたかのどちらかだったとおもわれる。

### 参考文献

- 朝倉治彦編（1982）『太政官記事』第1巻，東京堂出版。  
石井良助編（1981）『太政官日誌』第5巻，東京堂出版。  
石井良助編（1981）『太政官日誌』第6巻，東京堂出版。  
石田孝喜（1983）『幕末維新京都史跡事典』新人物往来社。  
『伊地知貞馨事歴』，1887。  
稲村徹元編（1972）『大正過去帳』東京美術。  
伊藤痴遊（1925）『明治裏面史』成光館出版部。  
伊藤仁太郎（1929）『伊藤痴遊全集』第8巻，平凡社。  
内川芳美・松島栄一監修（1986）『明治ニュース事典』第8巻，株式会社毎日コミュニケーションズ。  
大糸年夫（1939）『幕末兵制改革史』白揚社。  
大久保達正監修（1989）『松方正義関係文書』10巻，大東文化大学東洋研究所。  
大月ひさ（1902）『英雄の片影』文学同士会。  
「海軍」編集委員会編（1981）『海軍』第2巻，誠文図書株式会社。  
海軍歴史保存会編（1995）『日本海軍史』第1巻，第一法規出版株式会社。  
外務省編・外務省蔵版（1994）『日本外交文書』明治第三巻，巖南堂書店。  
鹿児島県維新史料編さん所編（1974）『忠義公史料』第1巻（鹿児島県史料）鹿児島県。  
鹿児島県維新史料編さん所編（1975）『忠義公史料』第2巻（鹿児島県史料）鹿児島県。  
鹿児島県維新史料編さん所編（1979）『忠義公史料』第6巻（鹿児島県史料）鹿児島県。

---

287) 高島（1910）p. 48.

- 鹿児島県維新史料編さん所編（1980）『忠義公史料』第7巻（鹿児島県史料）鹿児島県。
- 鹿児島県維新史料編さん所編（1978）『日記雑録追録』8（鹿児島県史料）鹿児島県。
- 鹿児島県史料刊行委員会編（2001）『薩藩学事一・鹿児島県師範学校史料』鹿児島県史料集40，鹿児島県史料刊行会
- 鹿児島県編（1879）『丁丑乱慨』乾，坤，鹿児島県。
- 鹿児島県編（1967）『鹿児島県史』3・4・別巻，鹿児島県。
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1988）『大久保利通史料一』（鹿児島県史料），鹿児島県。
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1992）『玉里島津家史料』1，（鹿児島県史料），鹿児島県。
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1993）『玉里島津家史料』2，（鹿児島県史料），鹿児島県。
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1994）『玉里島津家史料』3，（鹿児島県史料），鹿児島県。
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1996）『玉里島津家史料』5，（鹿児島県史料），鹿児島県。
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編（2001）『玉里島津家史料』10（鹿児島県史料），鹿児島県。
- 家臣人名事典編纂委員会編（1989）『三百藩家臣人名事典』第7巻，新人物往来社。
- 春日精之助編（1906）『春日潜庵伝』
- 勝田政治（2000）『廃藩置県』講談社。
- 金井之恭（他）（1981）『明治史料頭要職務補任録』三上昭美校訂，柏書房。
- 樺山資英伝刊行会（1942）『樺山資英伝』樺山資英伝刊行会。
- 旧別働第三旅団参謀部編（1884）『西南戦闘日注』長三堂。
- 京都市（1974）『京都の歴史』7，株式会社學藝書林。
- 近世名将言行録刊行会編（1934）『近世名将言行録』1，吉川弘文館。
- 宮内庁（1969）『明治天皇紀』第2，吉川弘文館。
- 宮内庁（1969）『明治天皇紀』第3，吉川弘文館。
- 宮内庁（1970）『明治天皇紀』第4，吉川弘文館。
- 宮内庁（1971）『明治天皇紀』第5，吉川弘文館。
- 宮内庁（1972）『明治天皇紀』第7，吉川弘文館。

- 公爵島津家編纂所編（1968）『薩藩海軍史』中・下，原書房。
- 西郷隆盛全集編集委員会編（1978）『西郷隆盛全集』第3巻，大和書房。
- 西郷隆盛全集編集委員会編（1979）『西郷隆盛全集』第5巻，大和書房。
- 西郷隆盛全集編集委員会編（1980）『西郷隆盛全集』第6巻，大和書房。
- 坂本辰之助（1930）『子爵三島彌太郎傳』昭文堂。
- 相良武雄（1926）「明治5年の横浜行幸」『新旧時代』明治文化研究会，第二年・第9冊，12月号，pp. 31-33。
- 『三方限名士略傳』三方限名士顕彰会，1935。
- 史談会編（1971）『史談会速記録』合本4，復刻版，原書房。
- 史談会編（1972）『史談会速記録』合本11，復刻版，原書房。
- 史談会編（1976）『戦亡殉死志士人名録』復刻版，原書房。
- 渋谷葉子（1996）「尾張藩市谷邸の歴史変遷」東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター編『尾張藩上屋敷跡遺跡，1』東京都埋蔵文化財センター調査報告30集，東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター，pp. 433-449。
- 下橋敬長（1979）『幕末の宮廷』羽倉敬尚（けいしょう）注，平凡社。
- 『掌中官員録』西村組出版局，1875。
- 新人物往来社編（2000）『幕末維新江戸東京史跡事典』新人物往来社。
- 『樞密院高等官履歴』第3巻，大正の一，東京大学出版会，1996。
- 杉本勝二郎編（1893 A）『華族列伝国乃礎』上，華族列伝国乃礎編輯所（霞会館，1991）
- 杉本勝二郎編（1892）『華族列伝国乃礎』中，華族列伝国乃礎編輯所（霞会館，1991）
- 杉本勝二郎編（1893 B）『華族列伝国乃礎』下，華族列伝国乃礎編輯所（霞会館，1991）
- 杉本勝二郎編（1894）『国乃礎』後編上，華族列伝国乃礎編輯所（霞会館，1991）
- 鈴木理生（2006）『江戸・東京の地理と地名』日本実業出版社。
- 『先賢伝記集』追手門学院小学校，1988。
- 千田稔（1978）『維新政権の直属軍隊』開明書院。
- 染川亨編（1936）『鹿兒島城下下荒田郷土史』鹿兒島市八幡尋常小学校創立六十年周年記念会。
- 高島鞆之助（1910）「王政復古の大業は是からだぞ」『日本及日本人』9月，pp. 43-48。
- 高島鞆之助謹話（1912），「神武以来の英主」『太陽』臨時増刊，18巻13号，pp. 32-37。

- 高島弥之助編（1937）『島津久光公』高島弥之助。  
東京市京橋区役所編（1983）『復刻 京橋区史』1, 2, 飯塚書房  
東京市麹町区役所編（1963）『麹町区史 全』（複製版）鳳文書館。  
東京市役所編（1916）『東京市史稿』皇城篇，第4，東京市役所。  
東京大学史料編纂所（1973）『保古飛呂比』佐佐木高行日記四，東京大学出版会。  
東京大学史料編纂所（1977）『保古飛呂比』佐佐木高行日記九，東京大学出版会。  
東京大学史料編纂所蔵版（1966）『維新史料綱要』卷4，東京大学出版会。  
東京大学史料編纂所蔵版（1998）『明治史要』全，附表，東京大学出版会。  
東京都編（1960）『東京市史稿』市街篇，第49，東京都。  
東京都編（1961）『東京市史稿』市街篇，第50，東京都。  
東京都編（1962）『東京市史稿』市街篇，第52，東京都。  
東京都編（1964）『東京市史稿』市街篇，第55，東京都。  
東京都編（1965 A）『明治初年の武家地処理問題』都市紀要13，東京都。  
東京都編（1965 B）『東京市史稿』市街篇，第56，東京都。  
内閣官報局編（1974）『法令全書』第3卷，復刻（1890），原書房。  
中嶋繁雄（1992）『事件で見る明治100話』立風書房  
『日本現今人名辞典』訂正3版，日本現今人名辞典発行所，1903。  
日本史広辞典編集委員会編（1997）『日本史広辞典』山川出版社。  
日本史籍協会編（1969 A）『大久保利通日記一』東京大学出版会。  
日本史籍協会編（1969 B）『大久保利通日記二』東京大学出版会。  
日本史籍協会編（1972）『薩藩出軍戦状』1，日本史籍協会叢書，東京大学出版会。  
日本史籍協会編（1982）『明治天皇行幸年表』続日本史籍協会叢書，東京大学出版会。  
日本史籍協会編（1983）『大久保利通文書一』東京大学出版会。  
橋口西彦（1932）「革丙將軍の横顔（一）」『三州』第13年4号，pp. 38-42。  
原武史・吉田裕編（2005）『岩波 天皇・皇室辞典』岩波書店。  
干河岸貫一編（1900）『続近世百傑伝』博文堂。  
日野西資忠（1952）『明治天皇の御日常』祖国社。  
平田元吉（1898）『三島通庸』平田元吉。  
富士川游（1969）『日本疾病史』平凡社。  
堀内信編（1938）『南紀徳川史』第17冊，南紀徳川史刊行会。  
松下芳男編（1942）『陸軍省沿革史』明治文化叢書12，日本評論社。  
三崎一明（2007）『高島鞆之助』追手門経済論集，第42卷，第1号，pp. 117-

163.

三宅雪嶺（1950）『同時代史』2巻，岩波書店。

明治文化研究会編（1967）『明治文化全集』第1巻，憲政篇，日本評論社。

元木貞雄編（1895）『世界軍人談』巻之3，文盛堂。

森銑三（2001）『新編明治人物夜話』（小出昌洋編）岩波書店。

南日本新聞社編（1967）『鹿児島百年』上，謙光社。

山口常光編著（1973）『陸軍軍楽隊史』三青社。

渡邊幾治郎（1958）『明治天皇』上・下，宗高書房。

渡邊銀太郎（1912）『明治天皇御大葬御写真帖』前巻，後巻，新橋堂書店。

（付記）

引用文について，仮名遣いを新仮名遣いに改めた箇所，漢字を当用漢字に改めた箇所がある。また引用文にある振り仮名，傍点の一部を除き省いている。

（2008年6月30日受理）